女子國文新編

四年制　巻三

375.9
Ka9
資料室

42379
教科書文庫
4
8/0
42-1938
200030
1506

資料室
375.9
Kz.9

文部省檢定濟
昭和十三年二月四日　高等女學校國語科教科書

女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授
垣内松三編

廣島大學圖書之印

廣島大学 教 35907 物

一　國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

目次（巻三）

一 結晶の力……島崎藤村……四
二 大日本國……芳賀矢一……一〇
三 峠の茶屋……夏目漱石……一三
四 草の匂……前田夕暮……一七
五 撃滅……小笠原長生……二六
六 新緑……五十嵐力……三七
七 電報……下位春吉……四五
八 蓮……豐島與志雄……五九
九 菅公夫人……山田新一郎……七〇
一〇 小品二題……薄田泣菫……七八
一一 雲のいろ〳〵……幸田露伴……八八
一二 アイヌの部落……金田一京助……九五
一三 盆燈籠……櫻庭篁村……一〇八
一四 線香花火……吉村冬彦……一一四
一五 入江の奥……若山牧水……一一八
一六 母へ……野上彌生子……一二五
一七 栖鳳畫談……竹内逸……一三七
一八 秋雜感……大河内正敏……一五一
一九 將軍乃木……櫻井忠溫……一五五
二〇 箱根路……正岡子規……一六五
附錄 常用漢字表

一　結晶の力

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ふうちに向うの河岸まで泳ぎ越すことが出來た。更にまた一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀨の速い遲いもわかつて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと溫いともわかつて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見ることも出來た。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は

島崎藤村　名は春樹。文學者。明治五年生。

隅田川　東京の東部を貫き東京灣に注ぐ。流域二百八十粁餘。河幅の最廣所は二百四十餘米。

「水には經驗のなかつた私」

普通の泳ぎ手が行けるところ迄は、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地がある。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸に居た頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸ひに一本の矢

小諸　長野縣北佐久郡の町。

小諸に居た頃　明治三十二年（作者二十八歳）より明治三十九年迄。

「文章の道にも」

が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸ひに當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。

これは文章の道にも當嵌めて見ることが出來る。たゞ好い文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ自己から正してかゝらねばならない。

*一手揃ひ

「文章の道にも」

「眞に好い文章を作らうと思ふものは」

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘返すことから始めた。土を碎いた。小石を擇り分けた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけに行つた。馬鈴薯の花が白く盛りな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも〳〵根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつ

サク　鋤で畠を打ちかへすこと。さくり。

た。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出來る。

われ〳〵が文章の手本とすべきものは何程われ〳〵の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは「悟る」といふことの初である。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初のうちは無暗に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある艪を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少なくて、身體全體の力で、ゆつくりと艪を押すことが出來るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうに、さう思つて漕いで行く樂しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。

文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の表白とはならない。眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。

（飯倉だより）

「文章の手本とすべきものは……あつても」

「『試みる』といふことは」

淺草の新片町　東京市淺草區の東南部現在同區柳橋に含まる。

新片町に住んだ頃　明治四十年（三十六歳）より大正二年迄。

淺草橋　神田川（隅田川に注ぐ）に架す。

兩國橋　隅田川に架す。

「文章の道にも」

「結晶の力」

二 大日本國

芳賀矢一

御祖の神の產ませし國に、
皇孫降りて君とし知らす。
寶祚は天地と窮りあらず。
この國、この君、世に類ひなし。

大君、民を子のごとおぼし、
國民、君をば親とし慕ふ。
さながら一家の睦みはとはに、
この國、この民、世に類ひなし。

芳賀矢一 國文學者。文學博士。昭和二年歿、年六十一。

「御祖の神の產ませし國」

「皇孫」

「寶祚」

「この國、この君、世に類ひなし」

大和の國の鎭めの山と
富士の嶺み空に神さび立てり。
尊き皇國の姿を見せて、
高きはこの山、世に類ひなし。

日出づる國のしるしの花と
櫻は霞にまがひて咲けり。
けだかく雄々しき國ぶり見せて、
匂ふはこの花、世に類ひなし。

（芳賀矢一文集）

「鎭めの山」

＊神さび

「しるしの花」

＊國ぶり

三 峠の茶屋

夏目漱石

「おい。」

と、聲を掛けたが返事がない。軒下から奥を覗くと煤けた障子が締切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかり竝んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい。」と、また聲を掛ける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝゝと騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる。其の上に、眞黑な茶釜がかけてある。幸ひ

夏目漱石　名は金之助。文學者。大正五年歿、年五十。

「『おい。』と聲を掛けたが返事がない」

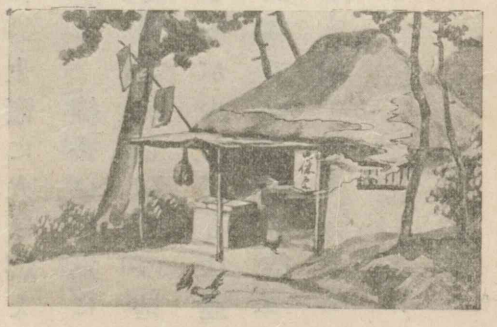
＊屈託氣

「『おい。』と、また聲を掛ける」

＊今しがた

下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて床几の上に腰を卸した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上にあがつた。障子が締めてなければ奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、こけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけけつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。しばらくすると奥の方から足音



「ずつと這入つて床几の上に腰を卸した」

「雞は羽搏きをして……」

「一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香」

＊燻る

がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。土竈に火は燃えて居る。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は呑氣に燻つて居る。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。おう〳〵、大分御

「煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る」

「どうせ出るには極つて居る」

濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と、立ちあがりながら「しつ、しつ」と二聲で雞を追下ろす。こゝこゝと駈けだした雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛びだす。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけられてある。

婆さんは袖なしの上から襷をかけて、土竈の前へうづくまる。自分は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しな

「しつ、しつ」と二聲で雞を追下ろす」

「まあ一つ」

＊無造作

がら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎今日は先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄土竈のうちがばち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嘸御寒かろ。」

と言ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

（草枕）

『さあおあたり。嘸御寒かろ』と言ふ。」

「青い煙が……板庇にからんで居る」

四 草の匂

前田夕暮

「今日も、私は白いお握りと、ゆで卵と、落花生とを持つて向うの林に行く。」

巴旦杏の木の立つてゐる——其の枝にはもう青い果がなつてゐる——村の小學校の庭を横切つて、往還へ出る。この村はどこへ行つても杉木立と桐畑とである。桐は今花ざかりだ。

往還を荷車を挽いて行く若い男がある。車の上には新しい蓆を敷いて、一人の老爺が乘つてゐる。顔を上に仰向けて、道のはたの桐の花を褒めながら、大きな聲で何か話し〳〵行く。挽いてゐるのは息子で、乘つてゐるのは父親であること

前田夕暮　名は洋造。歌人。明治十六年生。

巴旦杏　薔薇科の喬木。

＊往還

「大きな聲で何か話し話し行く」

がわかる。

「今日は、よいお天氣で……。」と老爺がいふ。

全くよいお天氣だ。畑には麥が青く穂立ち、その麥畑のなかに桐の花が咲誇つてゐる。向うを見ると、赤い屋根が林間にぽつり〳〵建つてゐる。

道は少し下りになつて田圃に出る。田圃には紫雲英が咲盛つてゐる。狐の牡丹やきんぽうげが光つてゐる。すかんぽが赤く穂を出して、風に吹かれてゐる。苗代田には水が見るから心地よく張られて、案山子がぽつんと立つてゐる。

田川の橋を一つ渡ると、其處に櫟の竝木がある。其の竝木路をぽつり〳〵と歩いて行くと、道は樫と杉と欅との古い森にはひる。其の森のなかには細い幽かな道が、木の枝のやう

紫雲英　豆科に屬する草本。

狐の牡丹　毛茛科の有毒植物で多年生草本。莖の高さ〇・七―一米。春より夏にかけて黄色の實を結ぶ。

すかんぽ　蓼科に屬する植物。すいば。

* 苗代田

「案山子がぽつんと立つてゐる」

「ぽつり〳〵と歩いて行く」

* はひる

に分れてゐる。どの道を辿つて行つても、人の家の庭に出られる。庭にはよく地車が挽きすててある。鷄がきよと〳〵と遊んでゐる。

庭の隅の日あたりには苗場があつて、甘藷苗や、茄子苗が盛上つてゐる。胡瓜苗はもう麥畑の畝間に移植されて、黄いろい花をつけてゐる。道は杉の植林のなかを通つてゐて、いよいよ幽かになる。孟宗藪のそばを通つて少し行くと、急に明かるくなつて、視野が濶くなる。其處には可なりに廣い草原が横たはつてゐる。草原には、もう野薔薇が咲きかけて、風にゆられてゐる。すい〳〵と茅花が青く抽きでてゐる。なかには白く穂を出してゐるのもある。空には雲雀が鳴いてゐる。あたりは一面の麥畑である。麥畑の向うに孟宗竹が青

地車　ぢぐるま。重いものを運ぶための車。低くて四輪ある。

* 畝間

* 視野

茅花　白茅の別名。ちがや。

黄いろくなびいてゐたり、家の屋根だけ見えたり、墓が四つ五つあつたり、行く人の頬被りが白く見え隠れしたり、若葉が燃えあがつてゐたり、林が青く風に吹かれてゐたりしてゐる。

私は冷たい草の上に腰をおろして、たつた一本生えてゐる原つぱの若木の楢の蔭で、風呂敷を披いて握飯を食ふ。鹽が少し利きすぎてゐるので、却つてうまいが、一椀の飯を握つただけなので、掌にのせてみると、一口に食はれさうである。それを私は少しづつ惜しんで食ふ。そして水筒から番茶の冷えたのを飲む。雲雀が一つすぐ私の頭の上に鳴いてゐる。初夏の雲雀の鳴聲は何となく寂しい音色だ。今頃は、大抵の雲雀は野良から曠野の草山へ移つてゐるのであるが、穂麥の畝間に、三番卵をでも孵して、つい山に歸りそこねてゐるのであらう。

「若葉が燃えあがつてゐたり、林が青く風に吹かれてゐたりしてゐる」

「草の上に腰をおろす」

「惜しんで食ふ」

＊番茶

「雲雀が一つ」

＊三番卵

私は握飯を食ひ終ると、また歩き出す。草原を横切つて少し行くと、道が麥畑の畦の所でなくなつてゐる。かまはずに畦を歩いて行くと、畑と畑との間に、道とも何ともつかず、人の歩いた跡が一筋幽かに通つてゐる。

その道を歩いて行くと、麥の穂がさや〳〵と風に鳴つて、私の肩や背に觸れる。畑中道にはたんぽゝの花が咲きつゞいてゐる。一株掘つて新聞紙につゝんで抱へて行くと、白く乾いた往還に出る。往還には一臺の荷馬車の轅の長いのが置かれてある。車の上には黒い野良着に、それでも赤い模様のある帶をして、手拭で顔を隠すやうにした若い百姓の女が二人、足を長く投げだして、何かひそ〳〵と話してゐる。

「人の歩いた跡が一筋幽かに通つてゐる」

「白く乾いた往還」

＊轅

少し行くと、馬が道のはたで青い麥を食つてゐる。その先には黑い牛が路に立ちはだかつてゐる。麥畑のなかに新しく家を建ててゐる人達が見える。柱が白々と光つてゐる。又少し行くと十字路に出る。露座の石佛が道の端に合掌してゐる。佛の足のあたりには、たんぽゝが黃いろく叢り咲いてゐる。木の葉に載せて何か上げてある。四辻の一軒家の障子には「酒さかな」と書いてある。その家の細い道をはひつて行くと、櫟や犬しでの混生林が私を待つてゐる。林には涼しい風が枝を動かしてゐる。私はその林のなかにはひつて、少し疲れたので、草を藉いて横になる。私の顏の直ぐそばに銀蘭が白く動いてゐる。手のところには羊齒がうす紅く若葉を出してゐる。日の光がちら〳〵とこぼれて來る。仰い

「柱が白々と光つてゐる」
「露座の石佛」
＊露座

犬しで 一名そろ。到る處の山野に自生する落葉喬木。
「草を藉いて横になる」
銀蘭 蘭科金蘭屬の多年生草本。莖は高さ約二五糎。春白色の花を開く。
羊齒 羊齒類。莖は地下莖にして毛茸あり、葉は羽狀復葉。うらじろ。
「日の光がちら〳〵とこぼれて來る」

で見ると、犬しでの軟かい若葉を透して日のありどころがわかる。風に梢が搖れる度にちら〳〵と光がこぼれるのだが、少しもまぶしくはない。此處で寢ながら、私はまた風呂敷を披いてゆで卵を食ふ。

林のはづれは野路になつてゐるので、時折人が通るが、私の寢てゐるのに氣がつかない。小娘が大きな青い藥罐を提げて通る。野良へお茶を運んで行くのである。

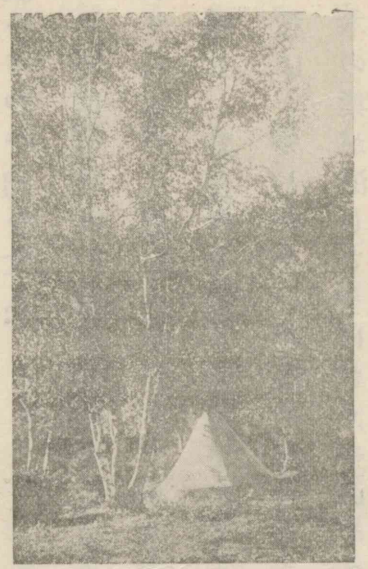
私はいつしかよい心持になつて、ついうと〳〵眠る、頭の上で木の葉が涼しさうにさゝやいてゐるなと思ひながら。

二三十分も眠つたらしい、私は自然に眼覺める。手に何か軟かい草の葉が觸れるので、折取つて見ると、蕨である。私は歸りにはこの蕨と羊齒とを掘つておみやにしよう。

「日のありどころがわかる」

蕨 水龍骨科蕨屬の多年生草本。
おみや お土產。

私は寢ながら色々な空想をする。去年の地震の時に、庭に野宿した涼しさを思ひ出すと、今年の夏は武藏野の林間を家族連れでテント旅行をしようと考へる。先づ八疊敷位のテントを一張り買入れる。疊椅子を二脚と、やはり折疊みの出來る卓子を一脚、それに白い毛布が三四枚あれば、それでもうよささうだ。ささうする。食料品は晝間附近の村から買ひあつめれば心配はない。



さて私達は、いよ〳〵林間のテント旅行に、一週間位の豫定で出かける。そして晝間は野を歩き廻る。疲れる頃に日が暮れる。林間にテントを張つて一夜の寢床をつくる。石油ランプと思つたが、提燈の方がよい。提燈に灯を入れて木の枝に吊す。其の下で簡素な晩餐を濟ます。子供達は疲れてゐるので、すぐにテントの中にはひつて寢て仕舞ふ。長男の方は二三年つゞけて、學校から箱根の仙石原にテント旅行に行つてゐるので、馴れてゐる。長女の方も今年からは、學校から行けるのであつたが、まだ地震の憂があるので、この夏は一年休むことになつた、といふやうな話をしながら、やがて眠つて仕舞ふ。私もそのそばに寢る。テントの上の木の葉が涼しく風に鳴つてゐる。なに、蚊がゐるだらうつて。さうか、なるほど、蚊が居るかな。少し位なら蚊遣りを焚いて我慢しよ

提灯

仙石原　箱根火山の火口原。神奈川縣足柄下郡仙石原村。

「なに、蚊がゐるだらうつて。さうか、なるほど、蚊が居るかな」

う。どうせ疲れてゐるから、すぐ寢ついて仕舞ふ。

朝は早く、空がしら〳〵明けになつた頃起きる。無論子供が先づはね起きて、大きな聲で戲れるので、私もすぐ眼を覺ます。顏は林の出はづれの田圃へ行つて灌漑用水で洗ふか、村に行つて、どうせ飲料水を貰つて來なければならないから、其の時冷たい井戸水で洗ふことにする。さう〳〵、アルコールランプも一つ必要だ、湯だけは沸かさなければならないから。

村の牛乳屋から買つて來た搾りたての牛乳とパンとで、簡單な朝飯を濟ませる。子供達はクレオンで林間の寫生をはじめる。私は組立椅子と卓子とを持出して、其處で讀書をしたり、手紙を書いたりする。

少し歩かうといふので、また林間から林間へ移つて行く。

「すぐ寢ついて仕舞ふ」

＊灌漑用水

途中でパンやら、卵やらを買つたり、手紙を村のポストへ入れたりして、何處といふあてもなく、青い草、綠の林を追うて旅をつゞける。さう〳〵此のテント旅行には、是非とも犬を同伴する必要がある、彼も家族の一員だから。

こんな風に私の空想は果てしなくつゞく。

日暮近く、私は兩手に抱へきれないほど、林間で掘取つた色色の雜草を抱へて、停車場への通りを急ぐ。私の服の上着も、ズボンも、草の匂がぷん〳〵してゐる。

（綠草心理）

日の光こもりてあつき芝生より羽蟻ひらめきぬ

ひのぼりたり

（前田夕暮）

「青い草、綠の林を追ふ」

「服の上着も、ズボンも、草の匂がぷんぷんしてゐる」

五擊滅

小笠原長生

「新來の敵艦隊に對しては、誓つてこれを擊滅して、宸襟を安んじ奉ります。」

御下問に對し、聯合艦隊司令長官東鄕海軍大將は、かう奉答した。列席してゐた山本海軍大臣・伊東海軍軍令部長は、その餘りに斷定的な奉答振りに、思はず大將の顏を見詰めたといふ事だ。されば、たとへ自信があるにもせよ、一些事たりとも苟もしない大將が、かうした思ひ切つた奉答をなすには、勿論それだけの覺悟がなくてはならない。そこで色々と揣摩臆測を逞しうする者も出來て、終にかういふ噂が傳へられた。その節隨伴してゐた第二艦隊司令長官上村海軍中將が控室に退つてから、大將に覺悟の程をたづねた處、大將は慨然として、「叡慮に懸けさせ給ふ聖顏を拜してはあゝ奉答する外ないではないか。」と答へたとの事だ。成程、聖顏を拜して大將が一層決心の臍を固めたには相違なからうが、如何なる場合たりとも、自信もないやうな事を輕々しく奉答するが如きは、大將の斷じてなさざる所である。卽ち大將は敵に對する勝算は、やはか違ふまいとの大信念の下に奉答されたものと私は確認する。されば敵艦隊擊滅の事態こそ、日本海に

三笠艦上の東鄕司令長官（東條鉦太郎筆）

小笠原長生　海軍中將子爵。慶應三年生。

「誓つてこれを擊滅」

＊宸襟

聯合艦隊

司令長官　東鄕平八郎

參謀長　加藤友三郎

參謀　秋山眞之

同　飯田久恒

同　清河純一

機關長　山本安次郎

軍醫官　鈴木重造

東鄕海軍大將　元帥侯爵東鄕平八郎。昭和九年薨、年八十八。

山本海軍大臣　海軍大將伯爵山本權兵衞。昭和八年薨、年八十二。

伊東海軍軍令部長　元帥海軍大將伯爵伊東祐亨。大正三年薨、年七十二。

＊揣摩臆測

上村海軍中將　名は彥之丞。後に大將に累進、男爵を授けらる。大正五年薨、年六十九。

＊慨然

※やはか

於て顯現したれ、我が全勝の士氣は既にこの御前における奉答中に嚴存し、神機もまた冥々の裏に活躍してゐたのである。

何時の時代の、何處の戰役においても、かりそめにも一方の指揮官たる者で、勝たなくてもよかつた者は、一人もない筈だが、今度新たに露艦隊を邀擊する我が司令長官ほど、責任の重い場合は滅多にあるまい。當時、浦潮にゐた僅かの露艦の爲にすら散々苦い經驗をなめさせられたではないか。ましてや新來の敵艦が浦潮に入つたとしたら、朝鮮海峽は絶えずその脅威を受けて、滿洲に屯する我が軍隊は後方聯絡の安定を得ざるのみならず、露國はまた決して媾和を申し出はしなかつたであらう。かう觀察してくると、全勝者たらねばならない東鄕大將の奉答は、當然すぎる程當然なものとなつて來るの

「全勝の士氣」

＊邀擊

浦鹽　露國の東洋艦隊の根據地。ロシーヤ・グロモボイ・ポガツイリ等の巡洋艦、水雷艇・潛航艇ありて、出沒自在、我が軍を苦しめたり。

＊全勝者

である。併しこゝに今一つ、大將の確信を裏書する有力な證據がある。それは開戰の當日、哨艦から敵艦隊出現の警報に接した際、大將は大本營に「直ちに出動、これを擊滅せんとす。」と電報した。全勝の自信がなくして端的に擊滅などと言切れるものではない。これに徵しても大將の覺悟は明々白々で、その偉大さはむしろこゝに存すると思はれる。

しからば大將は、どうしてそれ程までの自信を得られたのであらうか。これは日本海々戰に對し、重要な關係を有するものであるから、その大要を述べる事にしよう。

先づ御稜威と臣民の忠誠とに由り生ずる天祐神助を大將は確信せられた事である。我々のやうな凡慮を以て淺くこれを見ると、何だか迷信臭くも思はれるが、大將の天祐神助に

大本營　當時、東京市に在りき。

直ちに出動云々　「敵艦見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直チニ出動コレヲ擊滅セントス。本日天氣晴朗ナレド波高シ」（日本海々戰公報第一。）

日本海々戰　明治三十八年五月二十七・八日。

「御稜威と臣民の忠誠とに由り生ずる天祐神助」

對する觀念は、決してそんなものでは無い。國家としても、個人としても、至誠によつて磨きだされた正義の光は、必ず神界の明鏡に映じ、その反射が天祐となり、神助となつて人界に下るといふのが、大將の信仰基調であるやうだ。されば「天は正義に與し神は至誠に感ず。」の信條を眞甲に振りかざして、向ふところには抗し得る何物もないのである。

「至誠によつて磨きだされた正義の光」

憶へば對露交渉のつひに斷絶したる明治三十七年の二月六日、艦隊を率ゐて佐世保軍港を出發した大將が、征途第一に發した命令は、

「天祐を確信して聯合艦隊の大成功を遂げよ。」

との一句を以て結んでゐるではないか。のみならず、爾後における重要な命令も、概ね天祐神助の確信すべきを示してゐ

「天祐を確信して」

るが、大將の純忠至誠を*瞻仰する全隊の將士は、これを天來の聲と聽いて絶大の權威を感じ、無限の意義を味はひつゝ常に勝利を收めたといふことだ。

「天祐と神助に由り、我が聯合艦隊は五月二十七・八日、敵の第二・第三聯合艦隊と日本海に戰ひて、遂に殆どこれを擊滅することを得たり。」

と筆を起した東鄕大將の海戰詳報は、各戰隊の戰況より戰鬪の結果を仔細に記述したる後、

「この對戰における敵の兵力、我と大差あるにあらず。敵の將卒もまたその祖國のために極力奮鬪したるを認む。而も我が聯合艦隊がよく勝を制して、前記の如き奇蹟を收め

*瞻仰「天來の聲」

得たるものは、一に　天皇陛下御稜威の致す所にして、固より人爲のよくすべきにあらず、特に我が軍の損失・死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に由るものとして信仰するの外なく、曩に敵に對し勇進敢戰したる麾下・將卒も、皆この成果を見るに及んで、たゞ感激の極、いふ所を知らざるものの如し。」

と結んでゐるところ、敬恭莊重の氣全文に溢れ、讀者をして肅然たらしめずんば已まないのである。　就中、「これを擊滅することを得たり。」の一句に至つては、大將が出發の際御前における御下問に對し、「誓つてこれを擊滅して宸襟を安んじ奉るべし。」と奉答したる所を果し得たるもので、誠忠無二なる大將の胸中、如何の感があつたらう。　私はこれを忖度して名狀

*忖度

し難い念に驅られ、知らず識らず涙が滲み出た。

日本海々戰は何といふ目醒ましい大勝利であらう。　敵の戰艦八隻・巡洋艦九隻・海防艦三隻・驅逐艦九隻・假裝巡洋艦一隻・特務艦六隻・病院船二隻合計三十八隻、排水量二十一萬千百二十噸中、亡失した勢力は實に十九萬五千百六十二噸に上り、ともかくも浦潮に達したのは巡洋艦一隻・驅逐艦二隻のみで、他に特務艦一隻が遙かに本國さして逃走した。　しかのみならず提督以下六千百六名が俘虜となつた。　さらに彼の記錄に據れば、この海戰における戰死者の數は將校以下四千五百四十五名を算したといふことだ。　これに對して我が損害は僅かに水雷艇三隻合計排水量二百五十五噸を失ひ、戰死者百十七名、負傷者五百八十三名に過ぎなかつたのは、何といふ不思

戰艦八隻　スワロフ・アレクサンドル三世・ボロヂノ・アリヨール・オスラビヤ・シソイウエリーキイ・ナワリン・ニコライ一世。

巡洋艦九隻　ナヒモフ・オレーク・アウロラ・ドンスコイ・モノマフ・スエートラナ・アルマーズ・ジエムチウグ・イズムルード。

海防艦三隻　アプラクシン・セニヤーウイン・ウシヤコフ。

提督　ロシエストウエンスキー中將。西暦一九〇九年歿、年六十二。

議さであらう。

聯合艦隊の凱旋に際し、そこにもこゝにも東郷大明神と書いた旗や幟を押立てて、大將の通過を拜んでゐたものが澤山あつたのも、感激の迸るところ、然こそと頷かれた。しかも純忠謙讓な大將が、戰捷を以て一に御稜威と臣民の誠心の致すところと信じ、伏目勝ちに控へた態度を見て、涙をおとす者さへあつた。

（撃滅）

えびすらが寄せくる艦はしづめても御稜威をあげよすめらくにびと

（東郷平八郎）

「東郷大明神」

「伏目勝ちに控へた態度」

六新綠

五十嵐　力

自然を見る眼が暗いのであらう。私が新綠の美といふものを心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうになつてからである。冬の中に寒肥などをやつて、花を待ち若芽を待つ、もどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅い白い色々の花が咲く。そしてそれが散ると、今まで堅く結んでゐた葉が段々にほごれて來て、米粒・大豆粒位の小さなボツチの裡から、三寸・五寸・一尺・二尺といふ水々しい若枝が伸び出す。數枚・數十枚の透通るやうな若葉が開けて來る。木によつては尺にも餘る直徑の、化けさうな巨大な葉が、丁度手品師が小さい空箱から大きな雨傘を幾つも出すやうに、幾

五十嵐　力　文學博士。早稲田大學教授。明治七年生。

「草木を手がける」

＊寒肥

「もどかしい一日一日」

＊水々し

「化けさうな巨大な葉」

枚ともなく現れ出でて人を驚かす。

凡そ植物の一年間の生活の中で、新綠の時分ほど、驚異を現すことはあるまい。而して其の驚異が、一々我等が平生の手當心遣りに反應して來る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸の枝の伸びる所にも、限りなき喜びが湧いて來る。彼等の瑞々しい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心である。彼等の新しく生長する姿を見ながら、無駄枝・馬鹿枝を剪み切るのは、子供の身體から疣・瘤・塵物を除き去つてやる心である。柔かな枝の匂を妨げる古葉・枯枝を拂つてやるのは、子供の身體から髮を刈り、爪を切り、垢を洗つてやる心である。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひ落し、自然の風姿をほしいまゝにして、吾等を招くやうに、枝を伸

「瑞々しい生長」
＊頑是ない

ばし、葉を伸ばすところを眺め、晩春の柔かい日光が透通るやうな薄綠の葉に濾されて、春溫の煙るやうな木の下蔭をそゞろあるきする心の喜びは、實に何ともいふことが出來ぬ。

「花といへば紅い色を思はせるやうに、綠といへば直ぐに青い色を思はせる。けれども「新綠」といふのは、無論新しい木の葉のあらゆる色を含めていふので、綠や青に限つたのではない。「綠の錦」といふのは、この若葉の無數の色を一番力のある綠に統べさした名前である。

新綠は紅・白・黃・紫など、花の有つて居る無數の色を殆ど悉く備へて居る外に、如何なる花も有つて居らぬ一つの色を有つて居る。「綠」である。「青い色」である。西洋では「青い花」といふ詞が、「世の中に無いもの」といふ意味に使はれて居るが、綠の色

「春溫の煙るやうな木の下蔭」

「綠の錦」

は、實に葉のみの有する特權である。「綠」は、造化が花に禁じて葉にのみ許した貴い色である。花に取つては禁色であり、葉に取つては「ゆるし色」である。あらゆる色を許されて綠のみを許されなかつた花は、いかなる羨みの眼を以て葉を眺めて來たであらう。貧しいながら凡ての色を許された上に禁色の綠を豐かに許された葉は、如何なる誇りを以て花に臨んで來たであらう。櫻が散つてから栗の花の鬱陶しく香ふまでの五十日は、花に色の數々を盡くさした上に、許しの一色を誇るための葉の季節ではなからうか。植物學者は花は葉の變形だと說いて居るが、さすれば葉といふ親が、自分に存在の意味を留めるために、此の一色を美しい子に惜しんだのではなからうか。

「葉のみの有する特權」
*造化
禁色　キンジキ。衣服の染色。深紅・深紫等の如く常人には禁止された色。
ゆるし色　紅色・紫色等の薄くして、常人にも許された染色。

我等は無盡藏なる水や空氣を貴ばぬやうに、多きに馴れて綠の葉を貴ばぬやうになつて居るが、綠の色ほど人に好い感じを與へるものはない。そして其の綠の色の生粹を現したものが新綠である。新綠は、人間が綠の色に馴れて之を輕んじようとする心を驚かして、其の絕大の價値を覺らしめようとする自然の示威運動（デモンストレーション）である。

「家にのみ籠つて居て、殆ど旅行といふものをしたことのない私は、まだ大山・大河・大平野などに於ける大舞臺の新綠の美に打たれたことがない。たゞさういふ景色で平生あこがれて居るのは、嵐山の新綠である。私は數年前、四月はじめの櫻の盛りに嵐山に遊んだことがあるが、あの櫻・楓が常磐木の間に織込まれ、長い枝を川の上に伸ばして、澄んだ淵に全き影を

「其の絕大の價値」

「大舞臺の新綠の美」

嵐山　京都市右京區。櫻・紅葉の名所。

映し、淺瀨の白波に青い影を碎かせて、渡月橋の上十町を裝つた景色が、どんなだらうと思ふと、そゞろに胸の躍るのを覺えて來る。

新綠は私に取つて、實に花にもまさる喜びである。野山の大きな景色は云ふに及ばず、猫の額のやうな小さい庭の新綠でも、なほ自分の小さい心に盛り切れぬ喜びと感謝とを湛へてくれる。

（野草集）

うす綠庭椅子のうへにかゝりたる埃をはらふ朝のしづけさ

（土岐善麿）

渡月橋 嵐山の麓、大堰川に架する。長さ約二〇二米。

＊そゞろ

「喜びと感謝とを湛へてくれる」

土岐善麿 歌人。東京朝日新聞社記者。明治十八年生。

七電報

下位春吉

アドリヤ海は、今しも夕陽を浴びて眞紅の色に染められてゐる。風もそよがず、波も立たぬ。それが何時ともなしに夕闇の色に塗りかへられて間もなく、伊のアンコーナ港の埠頭から二隻の自動艇が離れた。二筋の白い線を引いて北へ北へと走る。その一隻にはリッツォ少佐、他の一隻にはアオンツォ少尉。何れも六人の水兵を乘せてゐる。彼等は敵岸近きプレムーダの群島中に身を潛めて、明朝まで敵狀偵察の任に當つた。

二つの籾殼のやうな自動艇は、舳を眞直ぐに小ルッシン島に向けてゐる。着いたのは午前一時頃、その島陰に船を留め

下位春吉 東京高等師範學校出身。ローマ大學教授。

アドリヤ海 イタリヤの東北、大陸との間の海。

アンコーナ港 イタリヤ中央部東海岸の港。

「二筋の白い線を引いて」

リッツォ少佐 イタリヤ人、今海軍中佐。

プレムーダ クワルナローロ灣の群島。

＊偵察

＊舳

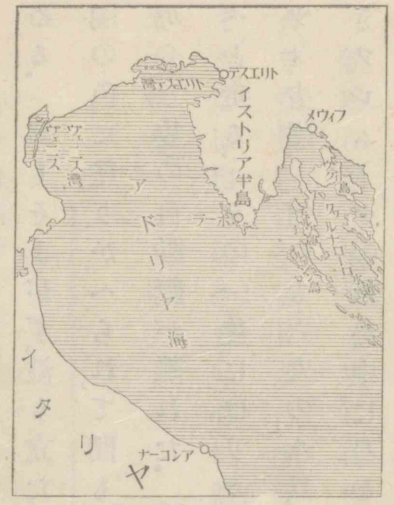
小ルッシン島 カルネロ灣內、カルソ島の南西。

て、よき敵もやと待伏せしながら、四方の偵察に忙しい。しかし何等の異狀もない。時は刻々に移つて午前三時になつた。もはや東明に近い。根據地に引上ぐべき時間だ。リッツォ少佐は歸航準備を命じた。

かくて二隻の小艇は相前後してアンコーナに向つた。

數十の島々の間を縫うてクワルナローロの水路を南下する中に、東の空はほのぐ〳〵と曙が近づいた。地平線上が明かるくなるにつれて、水面が暗くなる。二筋の白い線が曉の闇の底に長い。

午前三時二十分、艇がプレムーダの近海サンセーゴ島の南



アドリヤ海附近圖

* 東明

「二筋の白い線が曉の闇の底に長い」サンセーゴ島　アドリヤ海の東の島。

方にさしかゝつた時、鋭いリッツォ艇長の目には、遙かなる地平線上に一點の黑煙を見とめた。すはは！　と見つめてゐるうちに、見る〳〵黑煙は二つとなり、三つ、五つ、八つ、十……幾すぢも幾すぢも林の如く地平線上に現れた。船だ。夥しい船だ。リッツォ艇長は雙眼鏡を取つて、徐ろにその商船なりや軍艦なりや、その大きさ、隊形等を凝視した。

軍艦である。正しく軍艦である。しかも超弩級の巨艦二隻を中に擁して、その周圍を十隻の驅逐艦が取捲いて進んで來る。中の戰艦は、その著しく後方に傾斜したる煙突と、どつしりした砲塔の恰好から推して、疑もなく墺洪帝國の海軍の重鎭たるビリブスーウニチス號型だ。二萬噸の巨艦が前と後とに山の動くが如く進んで來る。之を擁護する驅逐艦十隻

* 凝視

「地平線上に一點の黑煙を見とめた」

「正しく軍艦である」

* 超弩級

* 重鎭

は、前に一隻、後に一隻、左側に四隻、右側に四隻。その間各約三百メートル。都合十二隻の巨怪が堂々たる隊形を整へて南下して來る。

去んぬる五月十四日、大膽にも伊のペレグリーニ少佐は二名の水兵を率ゐて、敵の根據地ポーラ港に突入し、ビリブスーウニチス號型のドレッドノート、二萬噸の巨艦に肉薄した。一同は敵圍を突破して歸ることが出來ずに、遂に皆捕虜となつた。

敵の海軍はこれに懲りて、ポーラ港の不安を憂へて南方セベニコ又はカッタロの地に安全の根據地を求めんがために、夜に乘じて密かに南下するのであらうか。それとも更に南下して、土耳古の海軍と合して共同の作業につくためであら

＊巨怪

ポーラ港 イストリア半島の港。

ドレッドノート 弩級戰艦。

＊肉薄

セベニコ アドリヤ海に注ぐケルカ河の河口に當り、古寺院多し。

カッタロ アドリヤ海に面し、カッタロ灣の南東端にある海港。

うか。但しは又、イタリヤの沿岸を攻擊するためであらうか。何れにしても油斷のならぬ大敵だ。

しかしとても數に於て敵ではない。こちらは一隻にやうやう七人を乘せ得る小さな〳〵自動艇が二隻。總勢十四人で、何千倍の噸數・人數を有する大艦隊に對抗して戰ふ事は、到底不可能の事だ。一打にして打ちつぶされるのは火を睹るより明かだ。そんな危險を冒さずとも、敵艦を見て之を直ちにアンコーナに報告しても務はすむ。敵に見つからぬやうに密かに根據地に歸るのが當然であらう。

しかし、それはリッツォ艇長のなし得ざる處だ。彼の平常の箴言は、

「進擊せよ。常に進擊せよ。危險を意とせずして、最も强く

「油斷のならぬ大敵」

「火を睹るより明かだ」

「報告しても務はすむ」

＊箴言

「常に進擊せよ」

最も大なるものを進撃せよ。」

といふのである。彼は電の如く決心した、わづか十四人を乘せた二つの籾殼をもつて、堂々たる敵の大艦隊に向つて突擊しようと……。

リッツォ少佐は雙眼鏡をおろして、後方につゞくアオンツォ少尉の小艇に信號した

「見たか。」

すると、アオンツォ少尉が信號を返した。

「分つた。」

それだけである。何と痛快ではないか。こんな痛快極まる信號が又とあらうか。兩艇は更に一語をも交さず、互に大事を默解して、眞一文字に敵の大艦列に向つて突進した。

*二つの籾殼

「見たか」

「分つた」

勇士の決意は鐵のやうである。

リッツォ少佐の指揮する自動艇は、右側第二と第三の驅逐艦の間を突破して第一の巨艦を、アオンツォ少尉は同じく第三と第四の驅逐艦の間を突破して、第二の巨艦を襲擊することに決した。

アドリヤ海がほの〴〵と明けかゝる。海は穩かに、十四條の黑い煙が林のやうに立つてゐる。淡い靄が海の面を練絹のやうに包んでゐる。各驅逐艦の間は、其の距離三百メートルに過ぎぬ。見つかつたらそれつきりだ。極度に速力を緩めた二つの木の葉舟は、音をも立てで、夢の奥にひらめく鳥影のやうに、すると〴〵と敵艦の間をすり拔けて、大艦列の眞中にもぐり込んだ。十二隻の敵艦につけられたる數十の哨兵が、

「勇士の決意は鐵のやうである」

「アドリヤ海がほのぼのと明けかゝる」

*二つの木の葉舟

*哨兵

誰一人この黑い「死の鳥」の影が彼等の懷にもぐり込んだのに氣づかなかつた。

自動艇からの魚雷發射は極めて困難である。艇は非常に小さい。僅か五六人の人を乘せるのもやう〳〵な位。無論水雷發射管はない。二個の魚雷を舷側に鎖で括りつけて、鉤でぶら下げて持つてゐる。それを發射するには、その鉤を外して海中に落すと、魚雷は一杯に詰められた壓搾空氣の力で走り出す。だから發射する時に、自由にその狙を定める事は出來ぬ。艇そのものを目標の方に向けて、魚雷の方向が丁度目標物に向つた刹那に鉤を外さねばならぬ。だから、非常に冷靜沈着な人に

「黑い死の鳥」

＊壓搾空氣

「冷靜沈着な人にして始めてその效果を收め得る」

して始めてその效果を收め得るのである。

リッツォ艇長は舵手長ゴーリに命じて艇をずん〳〵と巨艦の右舷間近に進めさせた。その距離今や僅かに百五十メートル。二萬噸のドレッドノートは山の如く鼻先に聳えてゐる。「よし、今！」

先づ右舷の魚雷を飛ばした。その瞬間、輕い自動艇が武者顫ひするやうに一搖れ搖れる。リッツォはさらに左舷に飛んで行つて、左方の魚雷を水中に放つた。「よし、やつた！ 全速力！ 後退！」

艇は忽ち眞白に波を切つて去る。彼は今一度死を賭して敵の艦列を突破せねばならぬ。

彼の自動艇が第一のドレッドノートの右舷から離れると

「よし、今！」

＊武者顫ひ

「よし、やつた！」

＊賭す

すぐに轟然たる二つの爆音が、靜かなるアドリヤ海の曙の靄を劈いた。第一の魚雷は第一・第二の煙突の中間の下方に、第二の魚雷は艦尾の砲塔の下方に命中したのだ。物凄い爆發と共に、忽ち眞黑い煙が空に聳え立つて、その中から赤い焰の舌がめら〳〵と躍り上る。阿鼻叫喚、一時に艦内から數千の叫び聲があがる。死の苦惱の如くに汽笛が長く〳〵悲鳴する。この刹那、忽ち又第二の巨艦の中腹に第三の爆音があがつた。アオンツォ少尉もまんまと艦列を突破して、第二の巨艦の右舷に迫り、一個の魚雷を放つたのが命中したのだ。

この瞬時の敵の混亂を想像せよ。

そもや何處から來た。どうして來た。全體何が來た。十隻の驅逐艦に犇々と護られてゐる巨艦が、二隻ともかくの如

「轟然たる二つの爆音が、靜かなるアドリヤ海の曙の靄を劈いた」

＊阿鼻叫喚

「そもや何處から來た。どうして來た。全體何が來た。」

く襲撃をうけようとは！

敵は大擾亂。各艦からひゞく非常の汽笛。乘組員の騷擾。二艦の急を救ふもの。大膽不敵な伊の小艇をおつとり圍んで砲火を浴びせるもの……

リッツォの艇は忽ち敵の三驅逐艦に見つけられた。彼等は狂ひ立つてリッツォの艇を追ふ。速力に於て、自動艇はとても驅逐艦に及ばない。その大きさに於ては霄壤の差がある。彼はあらゆる武器を備へてゐるのに、此方はステッキ位の速射砲一つを載せてゐるだけで、乘組は總員僅かに七人だ。距離は見る間にずん〳〵と近くなる。一番近い敵の驅逐艦が眞白に波を蹴立てて突進して來る勢の物凄さよ。どんどんと浴びせかけられる砲彈が、艇の四方に數丈の水柱を立て

「狂ひ立つてリッツォの艇を追ふ」

＊霄壤の差

る。

萬事休す。逃れるにはその速力がない。戰ふにはその武器がない。進んで衝突しても、籾殼同樣の自動艇は忽ち微塵に挫かれるばかりだ。何としよう。リッツォの果斷はこゝにある。リッツォの沈着はこゝにある。リッツォの豪勇はこゝにある。

「速力を緩めよ。」

命令を聞いて、ゴーリ舵手長が驚いた。

「大丈夫ですか。」

彼は自分の耳の聞違ひか、少佐の口の言誤りだと思つたのだ。

「上官の命令だ！」

「萬事休す」
「果斷」
「豪勇」
「速力を緩めよ」
「上官の命令だ」

艇長は獅子の如く吼えた。一同は少佐が發狂したものと思つたさうだ。無理もない事だ。敵艦三隻は「得たりや。」とばかり狂ひに狂つて邁進して來る。その間僅かに百メートル！ リッツォは莞爾として薄紅の曙の中に微笑んだ。

自動艇は潛水艇と戰ふために二三個の爆彈を積んで居る。これは潛水艇の前路に廻つて水中に投下するものだ。リッツォは逸早く爆彈の一つを擁して、冷やかに敵の近寄るのを待つてゐた。そして敵艦が手も屆く許り近づいた時、彼は爆彈を船尾の白波の中に放つた。敵艦はそれとも知らず眞一文字に突進して來た。忽ち起る爆發の轟き！ 驅逐艦の船首は大破損を起して、見る〳〵うちに傾いてしまふ。追擊して來た他の二隻も友の危急に心を奪はれて、周章狼狽、今や沈

*邁進
「薄紅の曙の中に微笑んだ」
「忽ち起る爆發の轟き」
*周章狼狽

沒せんとする僚艦の兩側に走つた、リッツォの艇を見棄てて。

「萬歲！　もう大丈夫！　全速力！」

リッツォの小艇は波を切つて、曙のアンコーナの港へ。それにしても心がかりはアオンツォ少尉の艇だ。無事に敵圍を逃れたかどうか。一同が心を碎いて彼方の海を見つめてゐると、遙かに白波を擧げて突進して來る一葉舟、正しくアオンツォの艇！　彼方から、此方から、狂喜してイタリヤ萬歲を叫んだ。喜極まつて十有四人は皆泣いた。地平線上に黑煙を見てから、二艇再び此處に相會するまで丁度二十分間。

霧紫に夜は明けて、三色旗が朝風に飜る。海はまだ眠るか、小波もない。

リッツォが二つの魚雷を驀（はなむけ）して、瞬時にして沈めてしまつ

*「萬歲！　もう大丈夫！　全速力！」
「曙のアンコーナの港へ」
*一葉舟
「黑煙を見てから……二十分間」
「霧紫に夜は明けて」
*詩

たのは、墺洪海軍の覇者ビリブスーウニチス號型の聖ステファノ號であつた。聖ステファノ號は無數の犧牲と共に卽時に沈んでしまつた。他のドレッドノートテゲトフ號も大損傷をうけたまゝ曳船せられて、出發地點のポーラ軍港に入つた。

爆彈を喰つた敵の驅逐艦は、大破損のまゝ二驅逐艦の間に挾まれつゝ、曳船せられて去つた。

六月十日の早朝、アンコーナの港內に二自動艇は揚々として引きあげて來た。總員十四人、たゞの一人として微傷を負うたものすらない。一同の意氣は天を衝くの概がある。一行は忽ち、知人や市民に十重・二十重と取圍まれた。その時のリッツォ艇長の語が、ゆかしい。

「夢のやうです。」

*覇者
ステファノ　キリストの死後最初の殉教者で墺國の守護聖徒。
*曳船
*天を衝く
「夢のやうです」

それだけ。そしてすぐ郵便局に行つて、まづ第一に故郷の老母に電報を打つた。

其の日正午少し前、ミラッツォにある母の許に一通の至急電報が着いた。胸を轟かして開いた母は、その電文の内容によつて、更に更に驚かされた。中にはたつた一語、

「嬉しくてたまらぬ。」

リッツォ艇長

市民の祝賀會をうけ、上下兩院・各大臣、その他各地の無數の公私團體から祝電や祝文をうけても、謙讓寡言な少佐は、

「祖國のために盡くすべき、私の神聖なる義務の萬分の一を盡くしたに過ぎません。」

と、くり返すばかりであつた。

（大戰中のイタリヤ）

「まづ第一に故郷の老母に電報を打つた」

ミラッツォ　シシリヤ島の港。

「たつた一語、『嬉しくてたまらぬ』」

＊謙讓寡言

「神聖なる義務」

八　蓮

豐島與志雄

私は蓮が好きである。泥池の中から眞直ぐに一莖を伸ばして、その頂に一つ、葉や花や實をつける、あの獨特な風情もよい。また單に花からばかりではなく、葉や實や根などからまでも、仄かに漂ひ出してくる、あの清い素純な香もよい。その形、その香、そして泥土と水、凡てに原始的な幽玄な趣がある。

田舍の子供達は、眞白な蓮の根をぽきりと折つて、中に通つてゐる八つの穴に何がはひつてゐるかと好奇の眼を見張りながら、いつまでも、じいつと覗き込む。または葉の莖を折取つて、それを更に幾つにも小さく折つて、折られた莖が細い絲でつながつてゆくのを、面白さうにぶら下げて眺める。それ

豐島與志雄　佛文學者。法政大學教授。東京帝國大學文學部講師。明治二十三年生。

にも倦きると、小川の清い水を葉の中にすくひ込み、鮒や鯰の子を捕へて來て、その中に泳がせて樂しむ。或はまた大きな花を折取つて來て、その眞白な花瓣を一つ〳〵むしり取り、黄色い雄蕊・雌蕊を中に乘せ、實を積んだ舟として、橋の上から川の眞中に、幾つも〳〵流し浮かべる。

蓮の葉や花が盂蘭盆の佛壇につきものとなつてゐるのは、佛教の廣まつてゐる地方共通の周知の事柄であるが、ある地方では、盂蘭盆の前、七月七日の七夕祭が、可なり盛んに行はれる。七八歳の子供達は、七夕に關係のある俳句や和歌や漢詩の類を、前々から習字しておいて、それを七夕の日の朝、普通の軸物くらゐの大きさに清書し、床の間に掛けて、いろんな果物や野菜の類を供へる。その後で、女の子は色紙で小さな衣服

七夕祭　一名「乞巧奠」。牽牛、織女の二星が陰曆の七月七日の夜天漢にて會合するといふ傳說より天漢を天之安ノ河に附會して天の川とし、織女星を棚機姫に附會して棚機津女又は棚機とよびならし、後その夜をも七夕といふ。

を裁ち、男の子は色紙の短册に勝手な文字を書きちらし、それを青笹の枝に吊して、縁先の庭に立てる。そして、それらの文字を書くために用ひられる硯の水は、蓮の葉に溜つた露の雫を最もよしとしてある。子供達は早朝から起上つて、夜のうちに蓮の葉に溜つてゐる水銀のやうにとろりとした清い露の雫を、いそ〳〵として集めに出かける。

さういふ話を、一昨々年の夏、私はある友人に向つてした。すると十日ばかりたつて、美事な紅蓮の一鉢を植木屋から屆けて來た。友人の名刺が附いてゐた。私の手蹟が餘り拙劣なので、蓮の葉の露を取つて習字でもせよといふ謎かも知れないが、併し私には非常に嬉しかつた。庭の眞中に据ゑさせて、仕事に疲れた眼を慰めた。徑一尺餘の小さな鉢だつたが、

五六枚の葉をつけ、花を二つ持つてゐた。鉢の中の藻の間に絲蚯蚓が澤山ゐたので、それを食ひ盡くさせるために、緋目高を四五匹放つたりした。

そのうちに、淡紅色の花瓣が散つて行き、葉も一二枚黑ずんで枯れていつた。花の後の漏斗形の蕚は、實を結ぶ樣子もなく、小さく萎びて立枯れてしまつた。殘りの葉も亦、霜を受けない先に枯れかゝつた。鉢の中を覗いてみると、彎曲したこちこちの根が、土の中に痛ましく露出してゐた。恐らく蓮は徑一尺餘の小さな鉢の中で、充分に伸びようとして伸びることが出來ず、窮屈の餘りに窒息しかけたのであらう。さう思ふと、吾が愛する此の蓮のために、充分の泥と水とを與へてやりたくなつた。

絲蚯蚓「あかこ」の異名。みゝず類に屬す。

私は近くの瀨戸物屋へ出かけていつて、其處にある一番大きな蓮鉢を買求めた。徑三尺ばかりの分厚なもので、田舍の廣々とした蓮田には及びもつかないが、一二株の蓮の生長には充分らしかつた。私はそれを日當りのよい所に据ゑて庭の隅から掘起した土を盛り、それを水にこねて、蓮を移し植ゑようとした。そこへ叔父がひよつこりやつて來た。漢籍や盆栽に親しんで日を送つてゐる叔父は、私の柄にもない仕事を見て、長い髯を撫でながら笑ひ出した。そしてこんなことを云つた。

「――蓮は秋に動かすものではない。春の彼岸頃、舊根が腐つて新芽が出だしたのを、逆樣に移し植ゑるのを以て法とする。併し、凡そ花卉のうちでも、水ものは最も栽培困難と

してある。素人の育て方で、蓮の花を一つでも咲かせ得たら、それこそ園藝の天才である。」

私はその天才にならうと欲した。そして叔父の意見を參考にして、蓮を移し植ゑるのを翌年の春まで延ばした。すると圖らずも意外な便宜を得た。

私の家へ、田舍から時々野菜物なんかを持つて來てくれる農家の老人があつた。その老人が、蓮を育てたいといふ私の志望を聞いて、蓮には都會のこんな痩せた土では駄目だから、上等の肥えた土を進上しようといふ好意を寄せてくれた。やがてその老人が、車に積んで運んで來てくれた土は、荒川岸の泥土とかで、壁土に用ひても最上等なもので、色は少し灰色がかつて、ねつとりとした重みのある濃密なものだつた。

私はそれに力を得た。春の彼岸になるのを待つて、小さな蓮鉢をひつくり返してみると、底の方に、か細い白根が腐らずに殘つてゐた。でも、それだけで大きな鉢には足りないやうな氣がした。で、更に植木屋から、白蓮と紅蓮との苗根を一株づつ取寄せ、その上田舍の老人に賴んで、普通の食用蓮の苗根をも取寄せ、それらを逆樣に鉢の中へ植込んだ。そして植木屋から聞知つた肥料として、大豆と乾鯡とを與へた。

所が、春がたけていつても、蓮の芽はなか〳〵出なかつた。其の代りに、鉢一面にぎら〳〵とした油が浮き、青褐色の苔が泥の面に擴がつていつた。そして六月の始め頃になつて、小さな蓮の芽が出だしたけれど、その卷葉が開きかけると、しなしなと横に倒れて、四五寸くらゐの大きさにしかならず、それ

もやがて縁の方から枯れていつた。そしてたゞ油と水苔とだけが、鉢の中一杯に漂ひ浮かび、泥の中からは泡が立ち、物の腐爛した臭氣が發散して、清淨な蓮の花も匂もその氣配だに見せないで、いぢけた小さな五六枚の葉だけが、枯殘つてゐるのみだつた。はじめ私は蓮を盛んに太らせるために、大豆を一合ばかりと乾鯡を七八本やつたのであるが、それが餘りに多過ぎて、蓮は肥料負けしてしまつたのである。私は悲しい氣持で、ぼんやり蓮鉢を見守るの外はなかつた。たゞ一つ私の心を慰めたことは、盂蘭盆の折、亡父と亡兒との位牌のある佛壇に、その蓮の葉を一枚供へることが出來たことである。

それだけのことを唯一の收穫にして、私はいつしか蓮鉢を忘れがちになつた。年を越して昨年の春、鉢の泥を半ば取換

水苔 水苔科水苔屬の多年生蘚類。帶白色又は青綠色。濕地に自生する。

へてやらうかとも思つたが、それもつい不精から時期を過して了つた。そして暖かくなるにつれて、鉢の中は油ぎつてねちねちして來たが、それと共に一つ二つの蓮の卷葉が出だして來た。強すぎる肥料のしみた泥土の中にも、根だけは生殘つてゐたものと見える。伸び出した葉は、前年と同じやうに、小さないぢけたものだつたが、それだけにまた可憐でもあつた。私はもう、花は勿論、大きな葉をも期待せずに、その小さな葉だけで滿足した。

蓮田

七月の末から房州の外海岸へ行つて、一夏を其處で過した。

盛んに繁茂してゐる蓮田を見ると、自分の貧弱な蓮鉢が思ひ出された。そして九月のはじめ家に歸つて來て、私は少なからず驚かされた。いつの間にか、庭の蓮鉢から相當に大きな葉が七八本も眞直ぐに伸び出してゐた。

たゞ悲しいことには、蓮の葉の裏面や柄に、油蟲が澤山群つてゐた。鉢の上の方に桃の一枝がさし出てゐる、それから傳播したものらしい。私は惜氣もなくその桃の枝を切りさつて、それを鏖殺してやつた。蓮の葉は勢を得たやうに、青々と茂つていつた。もう餘分の肥料も泥土に吸ひつくされたらしく、水がさつぱりと澄んで、青い藻まで生えてゐて、蓮特有の匂も、氣のせゐばかりでなく、實際に感ぜられた。それから霜時になると、枯蓮の趣も充分に見られた。

そして冬を越して、今年の春である。今日彼岸の入に藁の覆を取去つてみると、鉢の泥は肥えて黑ずみ、水は冷たく澄みかへり、所々に枯葉の柄が殘つてゐる。今に其處から青々とした卷葉が伸び出し、それが圓く大きく擴がつて、露の雫を宿すころには、更に蕾が伸び出して來て、夜明けの光に音を立てて、ぱつと開くであらうなどと想像すると、私は蓮の臺に坐するやうな淸淨な心境を覺えた。それにしても、鉢の中に生殘つてゐるのは、紅蓮であらうか、或は普通の食用蓮であらうか。或はその三つ共であらうか。それはこの夏、花の開く折の樂しみとして、私はうらゝかな春日のさす緣側に蹲つて、庭の蓮の鉢の方へ眼をやつて居る。（旅人の言）

九 菅公夫人

山田新一郎

菅公夫人は北野天滿宮の西の座に祀られてある。夫人は菅公に別れて數年の後には、棲むべき家もなくなり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓して居られたので、普通吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年、夫人が五十歳に達した時、醍醐天皇がわざ〳〵祝賀の勅使をお遣はしになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數の賢夫人であつた事は想像される。菅公の御子方はなか〳〵大勢あつたが、上の方の御子方四人は、菅公と同時に諸國に流されたほど、揃うて相當の地位に立つて居られた。これには夫人の內助も與つて力のあつたものと考へ

山田新一郎 元北野神社宮司。元治元年生。

菅公 菅原道眞。

北野天滿宮 官幣中社北野神社。京都市上京區。

吉祥院 京都府紀伊郡にあり。菅原氏の氏寺。淨土宗。

昌泰 醍醐天皇の御代の年號。その四年に「延喜」と改元された。

醍醐天皇 第六十代天皇。御在位寬平九年(一八九七)—延長八年(一九〇〇)。同年崩御、御壽四十六。

「揃うて相當の地位」

られる。

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛の夫人に別れを惜しまれたものともいはれよう。西遷の道すがらも、都への便りにことづけて、

君が住む宿の木ずゑをゆく〳〵もかくるゝまでにかへり見しはや

と盡きぬ名殘を惜しまれたのも、卽ちこの夫人に對してであつた。以て其の琴瑟の情もしのばれるのである。

延喜 醍醐天皇の御代の年號。(一九〇一—一九二三)。

太宰權帥 中納言を以てこれに任ず。大臣左遷の時は權帥に任ずるを例とす。

*な……そ

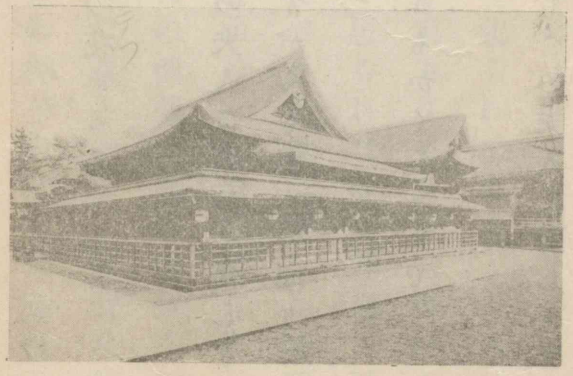
君が住む 此の歌は拾遺和歌集別の部にある。

*はや

「かくるゝまでにかへり見しはや」

*琴瑟の情

夫人の京都に於ける佗住居のさまは、菅公が太宰府謫居中の詩によつて多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲慘極まる二箇年の月日を送られたに比べて、京都の方も亦劣らぬ境遇であつた事が想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に、「雪夜思家竹」と題して、「家僕早逃散。凌寒誰掃撤」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪折竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷のことを氣遣つて居られる。此の詩は延喜元年、即ち「去年今夜」の詩を詠まれた年の冬の作

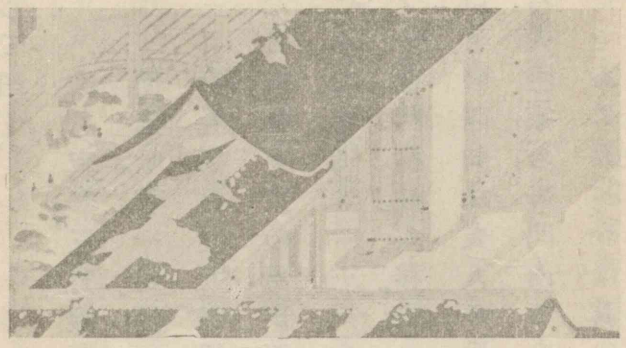


北野天滿宮

太宰府　福岡縣筑紫郡水城村に舊跡あり。現在の太宰府は町にして菅公を祀る官幣中社太宰府神社あり。

* 逃散
* 掃撤

去年今夜の詩　九月十日と題する。「去年ノ今夜清涼ニ侍ス。秋思ノ詩篇獨リ斷腸。恩賜ノ御衣今此ニ在リ。奉持シテ毎日餘香ヲ拜ス。」（菅家後草）



菅家玄關の圖（松梅天神緣起より）

である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子達は大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつたことは申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかもお咎を蒙つた菅家のことであれば、はしたない下男どもは早々逃出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて、氣丈に家政を齊へ、夫を大事に思つて居られたことは、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として現

* 右大臣

* 氣丈

* 躍如

れて居る。これも延喜元年冬の作と思はれるが、「讀家書」と題して曰く、

消息寂寥三月餘
便風吹着一封書

三月餘も都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日は如何なる吉日ぞ、東の風が吾が家の手紙を吹きつけて來た、嬉しいことである。

西門樹被人移去

以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたもので、右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今は其の樹を人が持つて行つたことを敍してある。多分米鹽の代に樹を賣つたか、取られたかしたのであ

「被人移去」

らう。

北地園教客寄居

天神御所の北地といへば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、こちらの方は他人に貸されたものと見える。これが昨日まで右大臣として帝の寵遇斜ならざりし菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持で此の手紙を讀まれたであらうか。

紙裏生薑稱藥種

昔の草根・木皮の藥には、生薑の配煎が必要とせられたのであるから、いはば生薑は家庭衞生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。」の句は、一物もいやしくもせられぬ夫人の用意の

「教客寄居」
* 天神御所紅梅殿　菅公の邸の名。
* 寵遇
* 菅公の夫人

「藥種」

程が知られる。

竹籠ニ昆布ヲ記ス齋儲ト

内の御祭の御供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされずに、直ちに竹筒に入れて、御祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は千言萬句よりも明かに、京地に殘された菅公一家の生活狀態を菅公の筆で現して居る。何たる悲慘の境遇であらうか。其の反面には、夫人が凛乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、藥餌の果てまでも注意して居られる誠に行屆いた齊家の有樣が、ありゝと見えるではないか。

「齋儲」
＊辨じる
＊凛乎
「百難を排す」
「齊家」

不レ言ヘ妻子飢寒ノ苦ヲ
爲是還ナリレ愁ヒ懊ヒ惱ヒ余ニ

留守宅の現狀は前の如くであるが、それをたゞ其の通りの事實として報じただけで、其の餘は徒らに夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は、一言もいうて來ぬ。言はないどころか、「御留守はとにかくどうにか遣つて居ます。」と、却つて安心を求めて來る雄々しさは、なかなか竝々の婦人に出來ることではない。榮華をこれ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない人といへようと思ふ。

（梅花遺芳）

「不言妻子飢寒苦」
＊懊惱
＊愚痴
＊榮華をこれ事とし
「第一人」

一〇 小品二題

栗

薄田泣菫

今日但馬にゐる人のところから、小包を送つて來た。手に取ると、包の尻が破けてゐて、焦茶色の大粒の栗の實が四つ五つ、ころ〳〵と轉がり出した。

「いよう。栗だな。丹羽栗だ……」

私は思はず叫んだ。そしてその瞬間、子供のやうに胸のときめきを覺えた。

どれもこれも小鳥のやうに生意氣に嘴を尖らし、どれもこれも小肥りに肥つて、はち切れさうに背を圓くしてゐる。

焦茶色の肌は、太陽の熱をむさぼるやうに吸つて、こんがり

薄田泣菫　名は淳介。詩人。大阪毎日新聞社客員。明治十年生。

但馬　兵庫縣の北部、丹波、丹後の西に續く。

「嘴を尖らし」

「背を圓くしてゐる」

と燒け上つた氣味だ。

唐木机の脚、かぶと蟲の兜、蟋蟀の太腿――强健なものは多くの場合に焦茶色にくすぶつてゐる。

夏の末に雜木林を通ると、頭の上に大きな栗の毬がぶら下つてゐるのを見かけることが、よくある。爆ぜ割れた毬の中から、小さな栗の實が頭を出してきよろ〳〵してゐるのは、巣立ち前の燕の子が、泥の家から空をうかゞつてゐるやうなもので、その眼は物好きと冒險とに光つてゐるが、燕の母親がその雛つ兒たちを容易には巣の外へ飛出させないやうに、胸に抱へた子供たちの向う見ずな欲望を知つてゐる栗の毬は、滅多に自分のふところを緩めようとはしない。

殼のなかに閉ぢ籠つて、太陽を飽食してゐる栗の實は、日に

唐木　もと支那を經て來たのでかう呼ばれるが、熱帶產の木材をいふ。

「物好きと冒險とに光つてゐるが」

＊向う見ず

「太陽を飽食してゐる」

日に肉づいて往つて、われとわが生命の充實し、內壓する重みに持ちこたへられなくなつて來る。

實が殼から離れゆく秋が來たのだ。內部の强い動きから、毬はおのづと大きく爆ぜ割れる。

向う見ずの栗の實は、「まだ見ぬ國」にあくがれて、われがちに殼から外へ飛びだして來る。焦茶色の頭巾をかぶつた燕の子の巢立ちである。

あるものは靜かに枯葉の上に落ち、あるものは石にぶつかり、かちんと音を立てて、跳ねかへりざま、どこかに姿をかくしてしまふ。——どちらにしても、親木の

栗

「まだ見ぬ國」

「焦茶色の頭巾をかぶつた燕の子の巢立ち」

＊內壓

立つてゐる場所から八尺とは離れてゐない。彼らはそれを少しも悔まない。彼らにとつて、ともかくもそこはまだ見ぬ國なのである。焦茶色の外皮の堅さは、こんな場合にもかすり傷一つ負はさない。

私はこんなことを思ひながら、栗の實の二つ三つを嚙んで、それを火鉢の灰に埋めた。灰のなかからぷす〳〵と煙がいぶり出して來た。

落梅の音

今年は梅雨前には、雨がひつきりなく降りつゞいたが、肝腎の梅雨に入つてからは毎日の好天氣で、自分の住まつてゐる近くの水田なども水不足で、田植が延びがちになり、宵ごとに聞く蛙の聲も何となく力がなかつたが、六月も末になつてか

「かすり傷一つ」

「蛙の聲も何となく力がなかつた」

ら雨は降出した。

初はしと〳〵と降出した雨が、やがて底を抜いたやうな土砂降りとなり、それが二日も三日も四日も五日も、どうかすると九日も十日も降續くと、天地は雨の光と影と響とに壓倒されて、草も、木も、鳥も、獸も、野も、山も、また人間も、まるで小さな魚のやうに、押流されてしまひさうな、危なつかしい氣持を抱かせられる。この危なつかしさを孕んでゐるのが梅雨の特徴で、芭蕉の、

さみだれを集めて早し最上川

といふ句を讀んで、岸を浸さんばかりの濁り水が、矢のやうに早く走つてゐるのを想像して、眼が眩ひさうになるまでに水の力に驚くのも、この危なさの氣持を感ずるからである。蕪村の、

さみだれや大河を前に家二軒

も、またこの危なさの美を外にしては味はゝれぬ句である。いつの年でも、梅雨に入つてどしや降りの大雨に、不安な危なつかしさを抱かせられる度毎に、私は喩へがたい一種の快感を覺えぬわけには往かない。

幾日か降續いた雨が、やがて降りくたびれる頃は、凡兆のいふ、

この頃は小粒になりぬ五月雨

で、長雨と大雨の憂鬱と不安とから救ひ出された、激情の後のぐつたりした疲れから產まれる明かるさといつたやうなものが、分毎に、秒毎に度を加へて來るのも、かうした時である。

「危なつかしさを孕んでゐる」

芭蕉 松尾氏。名は宗房。又幻住庵・桃青とも號した。正風(蕉風)の祖。俳人。元祿七年(一三四四)歿、年五十一。

最上川 山形縣の中部を流れ、酒田港に注ぐ。我が國三急流の一。

蕪村 谷口氏。後に與謝。名は四明。或は信幸。後、寅と改む。字は春星。夜半亭・三果等と號す。俳諧中興の人。又南畫派の畫家。天明三年(一三四三)歿、年六十八。

「危なさの美」

凡兆 野澤氏。芭蕉の門人。正德四年(一三七四)歿。

「ぐつたりした疲れから產まれる明かるさ」

また降續き、降暮した雨が、いつか夜になつて人の寢靜まつた後に、こつそり霽れて、それがちやうど月のある頃で、庭木の影が水のやうに窓硝子に浮かんでゐるのを、ふと眼が覺めて見る驚きなども、梅雨でなくては得られない趣である。

正岡子規筆　青梅寫生

月の無い、まつたくの闇の一夜、夜が更けて寢つかれないでゐると、さきがたから降細つた雨はいつしか止んで、草木といふ草木は、雫のたれる濡れ髮を地べたに突伏したまゝ、起上る力もなく、へと〳〵になつてゐる靜かさの底で、ぽたりと何ものか地べ

「人の寢靜まつた後にこつそり霽れる」

「靜かさの底でぽたり」

たに落ちるのを聞きつけることがよくある。

熟梅の一つが枝を離れた音である。

私はどんなときでもこの音を聞きつけると、梅の實が自分の心の深みに落ちて來たかのやうな、驚きとなつかしみとを感ずる。なに一つ動かない、閑寂そのものの微かな溜息が、樹の枝を離れて、眞直ぐに私の生命の波心にさゝやきに來たやうな感じである。

むかし小堀遠州は、古瀨戸の茶入「伊豫すだれ」を愛玩して、これを見ると、心はいつでも「わび」を感じるといつて、暫くの間も座右を離さなかつた。その子權十郎はまたその小壺に書きつけをして、

「昔年亡父孤蓬庵主小壺をもとめ、伊豫すだれと名づけ、その

「心の深みに落ちて來たかのやうな」

小堀遠州　名は政一。茶道遠州流の祖。正保四年（一六四七）歿、年六十九。

古瀨戸　後堀河天皇の安貞年中、尾張國瀨戸の陶工、加藤四郎入道春慶の燒きはじめた磁器。

茶入　茶の湯にて、抹茶を入れる小さな器。

「わび」

形たとへば編笠といふものに似て、物ふりて侘し。それ故に古歌をもつて、

あふことはまばらに編める伊豫すだれいよいよ我をわびさするかな

我が愚かなる眺にも、これを思ふに忽然としてわびしき姿なり。また寂寞たり。まことなるかな、青苔日々にあつくとあるも然り。年月をふるといへども、こと訪ふ人もなく、安閑の境界は却つて樂を招き、富貴を願はず、我が惑はぬ年をこそ、秋の夜の長きに老の寢覺のつれ〴〵に思ひ出してしるし侍る。」

といつてゐる。これで見ると、孤蓬庵父子はこの小壺に對すると、その形を見ただけで、もう「わび」の心もちに入ることが出

あふことは 詞花集卷八の惠慶法師の歌。

「青苔日々にあつく」

＊老の寢覺

＊つれ〴〵

來たものと思はれる。

私が梅の實の熟えて落ちる音を好むのも、つまりそれで、その音を聞くと、忽然として閑寂のふところに侘びの心持を味はふことが出來るからである。私が梅の樹に取圍まれた鄕里の茅屋に、いまだに斷ちがたい愛着を感じてゐるのもそれ。一本の梅の木もない今の借家に絶えず物足りなさを抱かせられてゐるのもそれ。また軒端の梅は實を採るものでなく、音を娯しむものとしてゐるのも、それゆゑである。（艸木蟲魚）

杏が熟れて落ちるのか　月夜の畑に音がする。
草木も眠つた　夜なかごろ　誰も知らない　音がする。

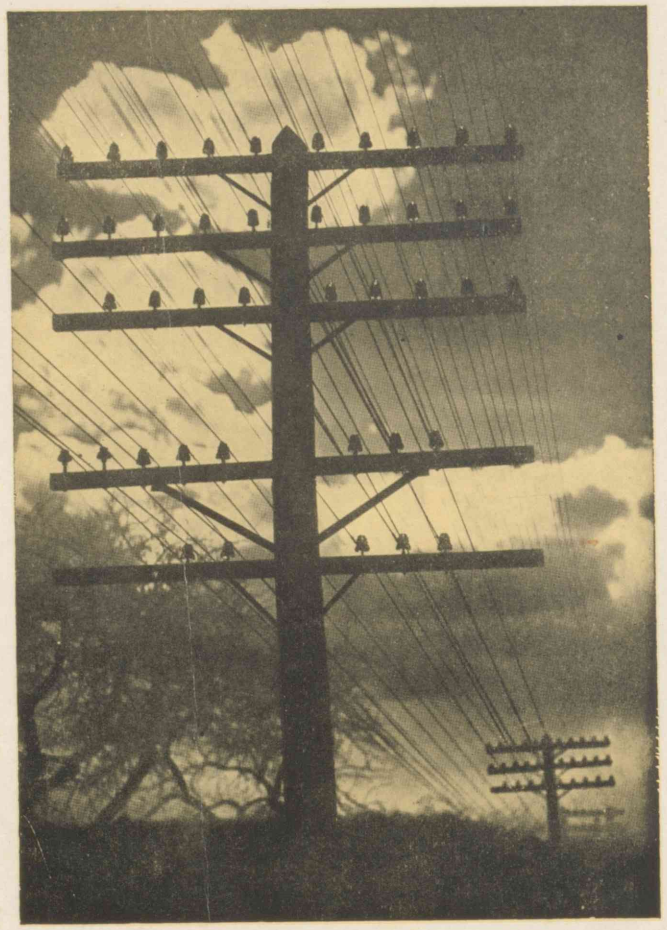
（島木赤彥）

「忽然として閑寂のふところに侘びの心持を味はふ」

＊愛着

「音を娯しむものとしてゐるのも、それゆゑである」

島木赤彥 アララギ派の歌人。大正十五年歿、年五十一。



雲のいろいろ

一　雲のいろ〳〵

夜の雲

幸田露伴

夏より秋にかけての夜など、美しさ言ふばかりなき雲を見ることあり。都會の人多くは心づかぬなるべし。舟に乘りて灘を行く折、天暗く水黑くして、月星の光も洩れず、舷を打つ浪のみ青白く騷ぎ立ちて、心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つとも想はるゝ頃、舟の上に獨り立ちて、海風の面を吹くがまゝ、衣袂濕りて重きをも問はず、寢られぬ旅の情を遣らんと、詩など吟ずる時、いなづま忽として起りて、水天一齊に凄まじき色に明かるくなり、千疊萬疊の濤の頭は、白銀の簪したる如く輝き立つかと見れば、怪しき岩の如く、獸の如く、山の如く、鬼の如く

幸田露伴　名は成行。文學者。文學博士。慶應三年生。

丑三つ　丑滿とも書く。今の午前三時近き時刻。

「いなづま忽として起りて、水天一齊に凄まじき色に明かるくなり」

*白銀の簪

空に峙ちわだかまり居し雲の、皆黄金色の笹縁つけて、いと嚴かに人の眼を驚かしたる、言はんかたなく美し。

雨後の雲

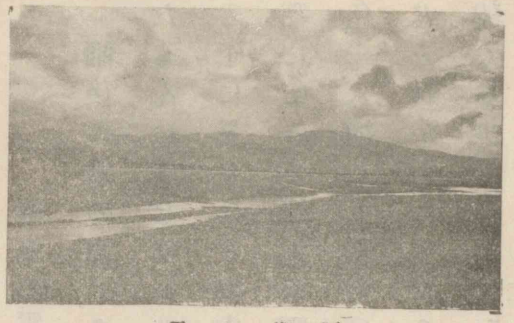
雨後の雲の美しさは、山にてこそ見るべけれ。低き山に居たらんには、なほかひなかるべし。名ある山々をも眼の前、脚の下に見るほどの山に在りて、夏の日の夕など、風少し有る時、谿に望みて遠近の雲の往來を觀る、いと興あり。前山の翠の色一入增して、裾野の風情も見所多く、一廓なせる山村の寺など、それかとも見ゆるに、濃く白き雲の足疾く風に乘りて空を翔くるが、自己の形をもかつ龍の如く、かつ虎の如く、飜りたる布の如く、張りたる傘の如く、さまざまに變へつゝ、山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前なるははふやうに去る

＊わだかまる「黄金色の笹縁つける」

「濃く白き雲の足疾く風に乘りて空を翔くるが」

「山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして」

かと見れば、後なるは飛ぶ如く來りなんどする狀、觀て飽くといふことを覺えず。小山の峯通りに立てる松の竝木の、遠見には馬の鬣（たてがみ）のやうなるが、現れつ隱れつし、金字塔形したる山の嶺の、心あてに見しあたりならぬ所に、突として面を出す、殊に面白し。



雨後の雲

蝶々雲

風吹く時、離れ〳〵になりたる大きからぬ雲の、色白き、或は薄黑きが、蝶の如くひら〳〵と風下へ舞ひつ飛びつして行くあり。蝶々雲とは面白くも名づけたるものかな。その實も風情あり、その名も亦風情ありと謂ふべし。

＊金字塔　**心あてに**　村田春海の歌に、「心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ空に晴るゝ富士の嶺」

「ひら〳〵と風下へ舞ひつ飛びつして行く」

ねのこ雲

蝶々雲は古き歌に見えたりや否や知らず。ねのこ雲といへるは仲正の歌に見えたり。夏の夜、秋の夜など、雨もたぬ空の晴れたるに、一叢の雲の、家（ねのこ）の如く丸く肥えて見ゆるが、月のあたり走り行くは、人々の知るところなるが、これも亦風情ある雲なり。

ねのこ雲

雲はらふ月の光に追ひにけりはしり散りぬるねのこ雲かな

と詠める歌は、面白しとも思はれねど、ねのこ雲といふ名を傳

仲正　源氏。後撰集の作家。

「はしり散りぬるねのこ雲かな」

へたる功は、この歌にあるべきにや。

雲のわざ

山上の雲

雲のするわざも多きが中に、いと面白きは、冬の日の朝早く、平かにわたれる雲の、谷を籠め、麓を蓋ひて、世の何物をも山の上の人には見せぬことなり。日輪未だ出で給はず、月落ち、星の光薄れながら、天なほひとしきり暗き頃、山高き所に宿りたる身の、萬づの物珍しきに、例になく夙く起出でて、戸なども自ら繰り、心締むるやうなる寒さを忍びて、眼を放つて見渡せば、きのふは脚の下に麓路の村も畫

の如く小さく見え、川の流の白きが、絲ほどに細くそれと知れ、深き谿を隔てて、かれこれと名ある山々の數多く連なり立ちたるが眼に入りしに、今は我が立てる處を去る幾許もあらぬ下より、遙かに向うの方、際涯知らぬあたりまで、平かにして大江の水の如くなる白雲たなびき渡り、村も隱し、川も隱し、山々谿々も隱しはてて、下界を海の底に沈め盡くせるが如くに見せたる、雲のわざとは知りながら、さすがに馴れぬ眼には驚かるゝものなり。

「開門忽怪山爲海。萬疊雲濤露一峯。」

と詩にいへるも、誠によくいひ得たりといふべし。

雲中の夢

上にあげたる如き白雲の中に眠りても、人の夢はなほ塵境

*際涯

「下界を海の底に沈め盡くせるが如く」

*見せたる

「露一峯」

「塵境に迷ひて」

に迷ひて、愚かなる事をのみ見るものなり。

白雲の中にいねても山を出でてちりの街にかよ
ふ夢かな

とは、我が或時の實際を詠みたる吟なりき。

かさほこ雲

南の方の空にさしがさを開きたるやうに立つ雲をかさほこ雲といふとぞ。其の雲やがて破れて、その破れたる方より風吹くと聞きたれど、市中にのみ住める身の、未だよく見知るべき時にあはざるこそ口惜しけれ。（講言）

三　アイヌの部落

金田一京助

明治四十年の夏のことである。小樽を立つたのは七月の十二日、樺太の奥山には木立に交つて山櫻がちら〳〵咲いてゐる頃であつた。

大泊に船待ちをし、毎日濃霧を託ちながら、やつと、米と味噌とを用意して、役所の見巡りの小蒸氣に乘つけて貰つて、目指す東海岸へ船出をしたのは十二日目、それでも海の上はまだ霧が深く、三晩、船の上に寢て、二十七日の朝に、やつと本船のボートで送られてオチョボッカのアイヌ部落へ最初の足跡を印したのである。

併し、思ひに思つて遙々訪ねて來たものの、私などは部落の

金田一京助　文學博士。言語學者。東京帝國大學助教授。明治十五年生。

小樽　北海道の商工都市。主要なる貿易港。

大泊　亞庭灣の北奥千歳灣の東岸に臨み、樺太第一の開港場。本島海陸聯絡の重要地。昔、コルサコフ又ポロアントマリと稱した。

オチョボッカ　富内郡富内村字落帆。

「思ひに思つて遙々訪ねて來た」

人々に取つては、面白くも可笑しくもない、何處からかまごまごして來た犬ころ程の興も惹かない存在だつた。愁に、民政署の船に乘つて來た洋服姿などは、意地悪な役所の看守人でもあるかのやうな氣分をさへ與へて、ともすれば一寸疑ひ深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、誰もみな背をむけてしまひ、口をつぐんでしまふ。笑ひさゞめいてゐた者も笑ひを收め、寄合つてゐた者も散じてしまふ。その寂寥さは譬へやうもない。皆目言葉が通ぜず、片言隻語も採集出來ずに、空しく一日が暮れてゆくのである。

役所の船から下りたものだから、居る所だけは、酋長ビシタクの冬期の住家を、がらんどうに明けて、一人ぽつんと居らしてくれるのである。又三度々々の食事は、同じ様に髪を垂ら

民政署　明治三十八年軍政の下に設置され、同四十年樺太廳が置かれて廢止された。

「意地悪な役所の看守人でもあるかのやうな」

＊片言隻語

した入墨の娘が來て、だまつて私の米と味噌とを小鍋へ入れて持ち去つて、一時間もすると、煖かい飯と汁とを作つて默つて置いて行つてくれるのである。但し物を言ひかけたら最後、ぐん〳〵逃げて行つてしまふ。晝の内は、まだ繪に描いたやうなアイヌの姿を目のあたり見てゐるばかりも慰めとなつたが、夜になると、鼻をつまゝれるのも知らないやうな闇の中に、磯うつ涙のざあと引いて行く佗しい音のみを聞いてゐると、物言ふ相手もない淋しさが込みあげて、啞の上に盲にさへ生まれて來たやうな境涯を感じた。

二日目も同じやうに暮れ、三日目も又それを繰返さなければならなかつた。

四日目の事だつた。淋しさは、もはや單なる淋しさではな

「啞の上に盲にさへ生まれて來た」

く、東京を立つて一ケ月、遂に何の得る所もなく歸らなければならぬのだらうか。その不安の憂悶が頭をかき亂して茫然として屋外に立つた丁度その時――

樺太アイヌの風俗

ふと見ると、後に子供達が何か喚きながら無心に遊んでゐた。行くともなく、その方へ引寄せられて行つたのは、言葉の一はしでも拾ひたかつたからである。じつと耳を傾けると、何といふ發音だらう。しやつくりしながら物言ふやうな喚き様で、ひと言だつて耳に止らない。但し子供だけに、私が近くに立つても、別に氣にもせず、夢中に囀つて遊んでゐる。ふと、その一人の腰に下つてゐる小刀に觸つて、タンベ・ネツプ・ネ・ルエヘアン？（其れは何なの？）と訊ねて見た。子供等は一齊に私の顔を見た。と思つたら、一度にわつと囃し立てて、蜘蛛の子を散らす様に逃散らかつた。

「通じないかな」獨りつぶやきながら途方に暮れてゐると、又三々五々集つては何か大聲に喚きながら遊ぶのである。又寄つて行つた。今度は言葉を換へて一人の子の耳に下げた環を指してマカナク・アイエプ・ネ・ルエ？（何と言ふものか？）と問うて見た。又振返つて全部の子供が私を仰いだが、「なあに言つてあがる」と云つた調子に、わあ！と喚いて逃出した。

子供等の内に、繪に見る唐子のやうな着物――多分滿洲方面からの外來品――を着てゐるのが一人あつた。その恰好

＊憂悶「茫然として屋外に立つた」

「わあ！と喚いて逃出した」

が一寸面白かつたので、單語を採集する筈の手帳へ、しやう事なしに、その子を寫生し始めた。

私が、その子を見ては鉛筆を動かし動かしするのを目さとく見つけた子供の一人が、先づ何とか喚いた。他の子も私を見て、又何とか喚いた。遊ぶのを止して、みんな私を注視した。眞先に見つけた子が、まづ怖々と、しやがんでゐる私へ近寄つて來て、物珍しげに私の描くのを覗いた。忽ちどや〳〵やつて來て、みんなで覗いた。年かさのが、唐子の服裝をした子を指して「お前が描かれたぞ」とでも云ふやうな樣子をした。すると、わい〳〵言出して、私の横から覗くもの、背後から覗くもの、中には無遠慮なのが、指を突出してもう私の畫面をつゝいて「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ」などといふやうに、自分の發見

「單語を採集する筈の手帳」

「指を突出してもう私の畫面をつついて」

を得意になつて、説明を引受けてゐるのさへある。が、ちつともその言ふ事が聞きとれない。

其の時だつた。ふと思ひついて、一枚新しい所をめくつて、誰にもすぐ解るやうに、大きく子供の顔を描いて見た。目を二つ竝べて描くと、年かさのが一番先に「シシ」「シシ」と言つた。他の子も「シシ」他のも「シシ」、とう〳〵差覗いてゐた子の口が皆「シシ」「シシ」「シシ」、騷がしいつたらない。その狀は丁度「目だよ、目なんだよ」「うん、目だ」「目だ！　目だ」とでも言ふやうに聞けたのである。

さうだ、北海道アイヌは「目」をば「シク」といふ。樺太では共れを「シシ」といふのかも知れないといふことが頭へ閃いたから、急いで畫の目から線を横へ引つぱつて、手帳の隅の所へシシ

「騷がしいつたらない」

と記入し、それから悠々と鼻を描いて行つた。年かさの兒が鋭い聲で「エトウプイ！　エトウプイ！」と叫ぶ。と、殘りの兒等も聲々に「エトウプイ！　エトウプイ！」。私は可笑しくなつたのを堪へて、又鼻の尖端から線を引いて行つて其の端へエトウプイ！　と書込んだ。そして口を描いてゆくと、やつぱり年かさの兒を眞先に「チャラ！」「チャラ！」「チャラ！」と大騒ぎ。眉を描くと「ラル！」「ラル！」「ラル！」。頭を描くと「サバ！」「サバ！」。耳を描くと「キサラ・プイ！」「キサラ・プイ！」。

忽ちの内に、支體の名が十數個、期せずして採集が出來た。可笑しいやら、愉快やら、かうなつたら、もう何でもない。競爭して向うから言つて呉れるのだから。

たゞ私は「何？」といふ一語が欲しくなつた。それさへ解れ

「競爭して向うから言つて呉れる」

ば、心の儘に、物を指して、その名を聞くことが出來るのである。そこで、ふと思ひついて、もう一枚紙をめくつて、今度は滅茶苦茶な線をぐる〳〵ぐる〳〵引廻した。年かさの兒が首をかしげた。そして「ヘマタ」と叫んだ。すると他の子供も皆變な顏をして、口々に「ヘマタ！」「ヘマタ！」「ヘマタ！」。

「うん！　北海道では『何』のことをヘマンダといふ。これだと思つたから、まづ試みようと、身の圍りを見廻して、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ヘマタ？」と叫んでやつた。

驚くべし、群がる子供らが私の手元へくる〳〵した目を向けて、口々に「スマ！」「スマ！」と叫んだではないか。

北海道では石のことをシュマといふ。して見ると、スマは石のことで、そして、ヘマタはやつぱり「何」といふことに違ひな

ささうだつたのである。

そこで勇氣を得て、も一つ足許の草を手に拐り取つて、ヘマタ？　と高く捧げると、子供達はムン！　ムン！　ムン！　と、ぴよん〳〵跳ねながら答へる。私は嬉しさに、子供等と一緒にぴよん〳〵跳んで笑つた。

可笑しかつたのは、私が自分の五厘ぐらゐしか無い七八本の顎鬚を摘まんで見せて、「ヘマタ？」と訊ねた時である。聲に應じて、子供等はノホキリ！　ノホキリ！　と答へてくれたので、Nohkiri「顎鬚」と記入した。何ぞ知らん Nohkiri は「下あご」だつた。鬚面に剛れてゐるアイヌの子供達の目には、私の摘まんだ鬚などは「鬚」の數に映じなかつたので、私の指は「あご」を摘まんでると思つたのである。

「ヘマタ？　と高く捧げる」

「子供等と一緒にぴよん〳〵跳んで笑つた」

併し、私はかうして、忽ちの内に、七十四個の單語を採集して元氣づいた。折柄、河原に集つて鱒を捕へてゐる大勢の大人達の所へ下りて行つて、覺えたばかりのほや〳〵單語を勇敢に使つて見た。

川原の石を指してスマと叫び、青草を指してムン、鱒を見てはヘモイ、鱒の頭を指してはヘモイ・サバ、鱒の目を指してヘモイ・シシ、鱒の口を指してヘモイ・チャラ！

これまで、むづかしい顔ばかりしてゐた鬚面が、もぢや〳〵の鬚の間から白い齒を現した。これ迄そむけ〳〵してゐた婦女子の顔にも、眞青な入墨の中から白い齒が見えた。明かに皆笑つたのである。中には向うから、網を持つてゐる手を振つて見せてヤー(網)と云つたり、砂地を指してオタ(砂)と云つ

「ほや〳〵單語を勇敢に使ふ」

「入墨の中から白い齒が見えた」

たりしたものもある。急いで手帳に書きつけながら、その發音を眞似すると不思議相に手帳を見に寄つて來るものもあつた。婦女子の群では、何時覺えたらうとか、よく覺えたもんだとか、いふやうな感歎の聲らしい聲をあげたものもあつた。

たつた、かうした間に、私に全舞臺との間を遮つてゐた幕がいつぺんに、切つて落されたのである。さしも超え難かつた禁園の垣根が、はたと私の前に開けたのである。言葉こそ固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。渠成つて水到る。茲に到つて、私は何物をもためらはず、凡てを捨てて驀地にこの小徑を進んだのは、殆ど狂熱的だつた。

一週間の後には、一寸私が首を出しても、右から左から言葉を投げられる。朝起きて川原へ顏を洗ひに手拭を下げて前

＊唯一の小徑
＊渠成つて水到る
「驀地にこの小徑を進んだ」

を通ると兩側のアイヌ小屋からナツケネ・エオマン・クス？（どこへ行きますか）、テマナ・エキ・クス？（どうしたんですか）などと、まるで田圃の蝗が飛出すやうに、ばた〳〵と足もすくむ程、詞を懸けられて、私が巧く答へられたと言つては笑ひ、とんちんかんに答へたと言つては笑ひ、顏を洗つてゐると、もう子供が起きて後へいつぱいやつて來てゐる。夜は若い者や年寄が、さしもがらんどうな私の宿も身動きもならない程詰めかけて、踊る、歌ふ、喋る。

四十日滯在の後に、大抵の話は支障がなくなつた上、樺太アイヌ文法の大要と、語彙と、北蝦夷古謠遺篇三千行の敍事詩の採錄を家苞に、私は、生涯忘れがたい思ひを殘して此の部落の老若に別れを告げた。

（北の人）

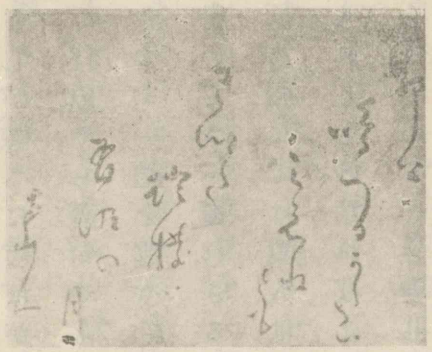
「田圃の蝗が飛出すやうに」
「詰めかけて、踊る、歌ふ、喋る」
＊語彙
＊家苞

一三 盆燈籠

饗庭篁村

文化元年の頃とか、小石川に庄助と呼ぶ男住めり。生まれつき愚直にて、日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川某寺の門前に立つ草市へ行燈々籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふもの更になく、賣れしはわづか十ばかりなれば、力を落し、情なき顏して擔ぎ歸りしが、南畝翁方へは常々出入るものゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所の者に向ひ、「偖々困ることかな。この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ殘り候。この分にては明朝神樂坂の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせしことにはあれど、聊か資本もかゝりたり。この分にては水も呑まれ申さず」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ杯を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや」と問はるゝにぞ、傍のもの、「かやう〳〵にて、又かのぐづ男が泣き申し候」と答へければ、翁は臺所に出でられ、「さても氣の毒なることよ。顋が乾きては難儀ならん。我がいふごとくせば、少しは賣るゝこともあるべし」といはれければ、「それは有難きことに候。いかに致すべきか」と、翁の顏を如何にも有難げに仰ぎ見て問



蜀山人筆蹟

饗庭篁村 名は與三郎。竹の屋とも號す。文學者。大正十一年歿、年六十八。

文化 光格天皇の御代の年號。(一八〇四—一八一七)。

某寺 こゝでは傳通院の名を以て知られてゐる無量山壽經寺のこと。淨土宗の大伽藍。東京市小石川區表町に在る。

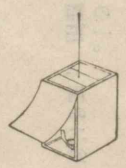
「力を落し、情なき顏して」

南畝翁 幕府の士。本名は大田覃。直次郎と稱し、南畝・蜀山人などと號した。狂歌をよくす。文政六年(一八二三)歿、年七十五。

神樂坂 東京市牛込區。

「水も呑まれ申さず」

盆燈籠



蜀山人筆蹟

郭公鳴つるかたはみえれども きいた證據は有明の月　蜀山人

「顋が乾きては難儀ならん」

ふに、翁は白紙を五帖ばかり取出し、「これにてその燈籠を張替へよ。我それに何か書きてやらん。」といはる。悅びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持きたれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつゝ一禮を述べて荷ひ歸りながらも、「蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書の反古張にては買人はあるまじ。」さりながら、あれほどに仰せられしものなれば、まづ明朝神樂坂の市に持行き、賣れ殘りたらば、そのことを申して歎きつき、二百匹も借りて外商ひの資本とせん。」と工面顏にて、足も重く二三町歩む向うより、侍一人來かゝりしが、供のものに言ひつけて、「その燈籠は賣物か。」と問はしむ。偖はと悅び、「いかにも賣物に候。やう〳〵傳を

* 狂歌
* 發句
「なぐりつけて渡されしに」
「頭を搔きつゝ一禮を述べ」
二百匹　一兩の二分の一。
* 工面顏

求めて先生に書いて貰ひ申したるにて、心あてもありて拵へ候なれども、このやうには入り申さず候。お望ならば差上げ申さん。」といふに、「價はいかほどぞ。」と問ふ。幾許といひてよきことやら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて「五十文。」といふ。「その値にて二つくれよ。」とて百文渡して買ひ行きたり。又後より通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし。」といふ。今度は息を一杯に吹きて、「六十四文。」といふ。いふがまゝにまた買ひ行きたり。後よりまた、「此方へも二つ。」「我にも一つ。」といふ有樣にて、おのが家に歸るまでに二十許りも賣りて、凡そ一貫二百文、骨折らずに取り、かくと女房に話せば、「誠に寢惚樣は生佛樣なり、有難きことなり。明日は早くより持出で給へ。私も參りて手傳ひ申さん、一人にては手が足る

「今度は息を一杯に吹きて、『六十四文。』といふ」
六十四文　百文の四分の三。當時は「九六百」といつて、九十六文を百文と稱した。それで物の値段は大抵八文・十六文・三十二文・四十八文（五十文といふ）・六十四文・九十六文（卽ち百文）と半端になつた。
一貫　昔は一千文、後世は九百六十文。

まじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女の智慧の慾が先なり。

夫婦は翌朝早起して神樂坂に到り、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と、立止りて價を問ふ。庄助思ひ切つて「百文」といへば「さもあらん。」とて買ひ行く。女房夫の袖を引き、「百にても値切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん、二百文といひ給へ。」と、又智慧をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百文はあまり高かるべし、百五十文にせん。」といふ。それより百五十文にて六七十賣り、終には先見明かなるその妻の言の如く、「二百文よりまかりませぬ。」と、肩を怒らして賣り、まだ五つ半にもならぬに賣れ切れ

寢惚樣　蜀山人自ら寢惚先生と戯號した。

「女の智慧の慾が先なり」

「二百文よりまかりさせぬ」

＊肩を怒らす

五つ半　今の午前。

たり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦はこけつ轉びつ翁の宅に來り、亭主をかきのけて女房まかり出で、「有難い。」を數千遍述べて、「いかにも先生は生神樣なり。」と今度は神あしらひにしつゝ悅び歸りきとぞ。翁が醉餘の戯、よく枯骨に膏すといふべし。

（雀躍）

時鳥なきつるあとにあきれたる後德大寺のありあけの顏

一つとり二つとりては燒いてくふ鶉なくなる深草の里

（蜀山人）

午後の九時頃をいふ。こゝでは午前九時頃。

「亭主をかきのけて女房まかり出で」

「醉餘の戯、よく枯骨に膏す」

一四 線香花火

吉村冬彦

夏の夜に小庭の縁臺で子供等の弄ぶ線香花火には大人の自分にも強い誘惑を感じる。これによつて自分の子供の時代の夢が甦つて來る。今は此の世にない親しかつた人々の記憶が喚び返される。

はじめ先端に點火されて唯かすかに燻つて居る間の沈默が、此れを見守る人々の心を正に來るべき現象の期待によつて緊張させるに丁度適當な時間だけ繼續する。次には火藥の燃燒がはじまつて小さな焰が牡丹の花瓣のやうに放出され、その反動で全體は振子のやうに搖動する。同時に灼熱された熔融塊の球が段々に生長して行く。焰が止んで次の火

吉村冬彦 本名は寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學教授。昭和十年歿、年五十八。

* 放出

花のフェーズに移る迄の短い休止期が又名狀し難い心持を與へるものである。火の球は、かすかな、ものの沸えたぎるやうな音を立てながら細かく震動して居る。それは今にも迸ばしり出ようとする勢力（エネルギー）が內部に渦卷いて居る事を感じさせる。突然火花の放出が始まる。眼に止まらぬ速度で發射される微細な火彈が、眼に見えぬ空中の何物かに衝突して碎けでもするやうに、無數の光の矢束となつて放散する、その中の一片は又更に碎けて第二の松葉第三第四の松葉を展開する。此の火花の時間的並に空間的の分布が、あれよりもつと疎であつても或は密であつてもいけないであらう。實に適當な步調と配置で、しかも充分な變化をもつて火花の音樂が進行する。此の音樂のテムポは段々に早くなり、密度は增加

フェーズ 面。形。

* 沸えたぎる

「迸ばしり出ようとする勢力が內部に渦卷いて居る」

* 光の矢束

「火花の時間的並に空間的の分布」

テムポ 速度。

し、同時に一つ〳〵の火花は短くなり、火の箭の先端は力弱く垂れ曲る。最早爆裂するだけの勢力のない火彈が、空氣の抵抗の爲にその速度を失つて、重力のために拋物線を畫いて垂れ落ちるのである。私の母は此の最後のフェーズを「散り菊」と名づけて居た。本當に單瓣の菊の萎れかゝつたやうな形である。「チリギク〳〵〳〵」かう云つてはやして聞かせた母の聲を思ひ出すと、自分の故郷に於ける幼時の追懷が鮮明に喚び返されるのである。あらゆる火花のエネルギーを吐き盡くした火球は、脆く力なくポトリと落ちる、そして此の火花のソナタの一曲が終るのである。あとに殘されるものは淡くはかない夏の宵闇である。

實際此の線香花火の一本の燃え方には「序破急」があり「起承

＊拋物線
＊散り菊
＊追懷
ソナタ 奏鳴曲。「淡くはかない夏の宵闇」
＊序破急
＊起承轉結

轉結」があり、詩があり音樂がある。

ところが近代になつて流行り出した電氣花火とか何とか花火とか稱するものはどうであらう。なる程アルミニウムだかマグネシウムだかの閃光は光度に於て大きく、ストロンチウムだかリチウムだかの焰の色は美しいかも知れないが、始めからおしまひ迄唯ぼう〳〵と無作法に燃える許りで、タクトもなければリズムもない。それで又、あの燃え終りのきたなさ、曲のなさはどうであらう。これも日本固有文化の精粹がアメリカの香のする近代文化に押しのけられて行く世相の一つであるとも云ひ度くなる位のものである。

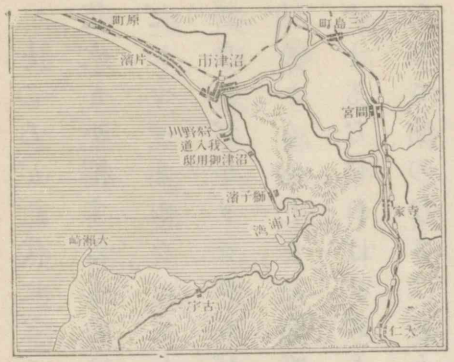
（寺田寅彦全集）

アルミニウム
マグネシウム
ストロンチウム
リチウム 何れも金屬元素の名稱。
＊閃光
＊光度
「無作法に燃える許り」
リズム 旋律。
＊曲のなさ
「日本固有文化の精粹」

一五　入江の奥

若山牧水

伊豆の大瀬崎と駿河の狩野川の川口との狹い間に、二三里も深く入込んだ入江の奥は、まるで山陰の池のやうな靜けさと、さうして物凄い程の深さとをもつて湛へて居る。そのあたり入江を挾んだ山はみな斷崖で、現にその崖をも切剝いで建築用の石材を採つてゐるので、樹木などもあまりなく、何となく寒げな姿をしてゐるけれども、その崖の根の水は全く深く澄んで、これが沖に連なつて、大きな浪やうねりを上げてゐる



大瀬崎附近

若山牧水　名は繁。歌人。昭和三年歿、年四十四。

大瀬崎　靜岡縣田方郡。

狩野川　靜岡縣駿東郡。

「まるで山陰の池のやうな」

のかと思ふと、不思議な氣がする位である。

或日の夕暮、私はふと氣まぐれに思ひ立つて、その入江の奥をせかせかと歩いてゐた。三時頃に家を出て、三里近い道をそこまで歩いて行つたのである。漁師町とも舟着場ともつかぬ五六十軒の家のかたまつた宿場が、その附近の崖の根に散在してゐる。ことにずつと奥になると、道は屈折の烈しい磯の崎を迂回することをせずに、宿場から宿場へ、崎の根方に隧道を穿つて通じて居る。がらん洞な一つを通り抜けると、恰も其處へ上から切出した石を落されたり、大きな聲でどなられたりして、ぼんやりした心を驚かしながら、いつの間にか、よく〳〵の奥のつまりまで、私は歩いて行つたのだ。

丁度そこの道下の狹い濱で小さな地引網を引いてゐた。

「その入江の奥をせかせかと歩いてゐた」

＊迂回

「よく〳〵の奥のつまりまで、私は歩いて行つたのだ」

「そこの道下の狹い濱で小さな地引網を引いてゐた」

＊地引網

私は道ばたの石に腰かけて、十人ほどの人の引いてゐるその網をじいつと眺めてゐた。もう上りに近い頃で、程なく私はそれが白子網であることを知つたが、いよ〳〵その上らうとする時であつた、中の一人が、何やら頓狂な聲を出した。すると十人ほどのすべてが、それに合はせて手足を振り動かすやうな大きな叫び聲をあげた。その聲を聞きつけると、つい近くの部落から四五人の男女が駈けだして來て其處に集つた。そして道から飛降りて、惶てて地引の仲間に加はる者もゐた。網尻について舟を浮かべてゐた二人の男は、その網の上り終るのを待ちかねて、網の中から二すくひ三すくひの白子を掬ひ取るや否や、自分の舟の中に打ちあけて、あたふたと沖の方に漕出して行つた。網につかまつてゐた者の中からも、二三人の男が矢庭に、其處の砂地に上げてあつた他の小舟を押下して、同じく地引網の中から白子を掬つて漕出した。その間に引手は無上やたらに急いで、地引を引上げたが、中にはかなりの白子が入つてゐた。けれど彼等は、それには殆ど眼もくれないさまで、たゞ一刻も早く引上げた網を整理しようとあせるらしかつた。しかし、なか〳〵それが思ふやうに行かなかつた。見物人は增し、彼等の叫び罵る聲は一層高まつた。

沖に漕出た舟は、いま掬つて行つた白子を頻りに海に撒い

白子　長さ三糎許り、白くて黑みがありどぢやうに似て、乾してシラスボシにする。

＊頓狂

地引網

「見物人は增し、彼等の叫び罵る聲は一層高まつた」

＊矢庭に

てゐた。見ると、その舟のぐるりに大きな渦の面のやうに、また夕立雨のふり注ぐやうに、無數の波紋がかすかな音をも立てかねまじき有樣で、一面に卷起つてゐるのである。それを見て私には彼等の叫び聲の意味が漸く解つた。白子を追うて來た何か他の大きな魚の群が、彼等の網のあとからいま其處に寄つて來たのである。白子はさて置き、まづその大きな魚族を逃すまいと、彼等漁師は勢ひこんでゐるのであつた。白子を撒くのは其處に寄つた魚族を逃すまいための囮であるのだ。

「何です。」

私は側に來て立つてゐる土地の者らしい若い女に訊いた。

「うづわですよ。」

「かすかな音をも立てかねまじき有樣」

*囮

うづわ　濃輪鰹の呼。腹に條がなく、背から尾まで渦の紋文あるもの。まぐろの一種。

「あゝ、うづわですか。」

うづわとは普通いふ鰹のことである。

舟では、一人の男が有合はせの釣道具に白子をさして釣り始めた。（鯊）釣に使ふやうな小さい竿が二重に曲るやうに撓んで、見る〳〵二尾・三尾と大きなうづわが釣りあげられた。そのうちに他の一艘は網の用意が出來たと見るや、くるりと漕返つて、濡れしとつた網を山のやうに積み載せると共に、どやどやと四五人の新しい漕手を乘せて、狂ほしげに漕出して行つた。一艘の方では、一人がせつせと白子を撒き、一人が頻りに釣つてゐるのである。それを中心にとり圍んで小さな圓を描きながら、網舟はえつさ〳〵と漕いで廻つた。

冬の夕暮のうすら明かりは、いつの間にか青やかな月の夜

「舟では……白子をさして釣り始めた」

鯊　體細長く圓く、口ひろく鰓大きく、背部は褐色で淡黑色の斑點がある。

「それを中心に……網舟はえつさ〳〵と漕いで廻つた」

「いつの間にか青やかな月の夜となつ

となつてゐた。其處から見る入江の向うの山陰は、墨繪のやうに深い影を作り、私等の立つてゐるあたりは、まともに滿月らしい光を受けてゐた。其處へ程なくその死物狂ひの網は引きあげられた。狂ほしい人影と叫び聲との中に打ちあげられた網の中のうづわは、素人目にも二百近い數がよまれた。網の者も見物人も、みんな全く醉つたやうな心持で暫くこれを眺めてゐた。

（靜かなる旅を行きつゝ）

足もとにさわげる浪は滿潮のゆたけき音を
たゝへたるかな

（若山牧水）

*まともてゐた」

*素人目
*よまれた
「みんな全く醉つたやうな心持で暫くこれを眺めてゐた」

一六 母 へ

野上彌生子

お母様、豫ての計畫通り、私たちは此の夏の一月をこの湖畔で過すために參りました。今日で丁度十日目になります。この湖の美しさ、ことに富士山を背景に持つた高貴さ。朝と晝と夕方と夜と、時々に依つてその魅力を變へて行く夢幻的な姿は、當分の間たゞ私たちを恍惚させたきりでした。

けれどもこの頃では私たちも、いつとなしにこの湖に馴れて來ました。私たちはもう初ほど夢中にならないで、靜かにこの景色を樂しめる心持になりました。東京の家の書齋の窓から庭の植込を眺めると同じ落着き、同じ靜かな悅びで、目前の湖を眺め、周圍の山々を見渡し、富士の根を仰ぎ、その裾に

野上彌生子 女流作家。野上豐一郎夫人。明治十八年生。

湖畔 精進湖々畔のこと。精進湖は山梨縣西八代郡の東、富士山の西麓に在る。富士五湖の一。

*魅力
「時々によつて魅力を變へて行く夢幻的な姿」

廣く横たはつてゐる青木ケ原の森林を望むことが出來るやうになりました。これで私たちは、一夜泊りの探勝者のあわたゞしい驚きと歎美から轉じて、氣永くこの湖との交りを樂しむ友達になり得たのだと思ひます。實際、私たちの借りてゐる山の小家の軒下に立つて、じつと湖を見下してゐますと、私たちが十日前までは、あの忙しなく目まぐるしい東京に住んでゐたとは到底思はれません。もう幾年間も、この山でこの湖を眺めて暮して來たやうな氣がいたします。

家の樣子を少し申し上げませう。

一體この精進湖は、富士山の周りにある多くの湖水の中でも、一番曲折に富んだ形を持つて、丁度一枚の無花果の葉を擴げたやうな恰好をしてゐます。三里に足らぬ周圍の間に、七

奇木ケ原　富士山麓山梨縣側にある大森林地帶。一望樹木の海の如しといふので「樹海」の名がある。周圍約十六粁。

*探勝者「あわたゞしい驚き　と歎美から轉じて」

*忙しなく

*目まぐるしい

*無花果の葉を擴げたやうな恰好　無花果　クワ科に屬する小アジヤ原産の落葉樹。高さ三米に達し、葉は互生し大形で、全葉或は二三裂し緣は鋸齒をなす。我が國に渡來せるは寛永年間のことといふ。

つの岬と、その數に伴なふだけの入江があり、東南に開けた青木ケ原の森林は、弓形に湖面まで伸び出て、それがその儘裾野に連なつて、其の上に富士が眞直ぐに聳えてゐるといふ順序です。その富士と青木ケ原を右手に取つて、西の方から一番最初に、かつ一番長く湖の中に突出てゐる岬が、ホテルの在る岬であります。そして私たちの借りてゐる家は、その岬と次の第二の小さい岬との間に作られてゐる入江を控へた高臺に、砂地の畑を前にして立つてゐます。

精進湖と精進ホテル

――村の人達は此處を明神澤と呼んでゐます。濱と云はな

いで澤と云ふのは、この上に谷川があるからだらうと思ひます。激しい降雨の後には、川は湖水まで走り下るのださうで、川床は濱邊まで續いてゐます。――けれどもその家は、本來は住宅ではなく、鱒の養殖所として建てられたもので、見掛けの大きい割に、部屋は番人の居場所となつてゐた八疊一間きりなのです。そして殘りの部分は悉く土間になつて、今は中止してゐる養魚上の樣々な道具が、一杯に積重ねたり立てかけたりしてあります。天井は張つてありません。そして普通の壁のある場所には、表から張りつけた南京蔀が、その儘一枚一枚顏を竝べてをり、內側からはまた、それ等の板を押へつけて排列を亂させまいとするかのやうに、三寸角の木材が隅から隅へと、十文字に足を踏みはだけてのさ張つてゐる光景は、

「激しい降雨の後には……續いてゐます」

南京蔀　支那風の蔀。「蔀」は日覆、又は風雨を防ぐための戸。

＊踏みはだけのさ張る

最初みんなの肝をひやしたやうに見受けました。

私たちには今一つの家があつて、この一間で出來ないやうな讀書とか書き物とかは、みな其處ですることにしてゐます。

その家は養魚所の後から、雜草と桑畑の間に通じてゐる小路を辿つて、一町餘り爪先上りに上つた山の登り口に立つてゐます。二間に二間半と云ふ建物ですから、下から眺めると、後にまつ黑い山を負ひ、周圍に高い木立を群らして、おもちやの家を一つ置いたやうに、小さく可愛らしく見えます。この家はホテルの先代が自分の隱居所に建てたのださうで、外觀はすつかり洋風に出來上つてゐます。正面の長い引きおろし窓には、鎧戸まで附いてゐます。昔は多分部屋の內側も板張りで、ベッドでも置いてあつたのでせうが、今は四疊半にだ

「みんなの肝をひやす」

＊今一つの家

「おもちやの家」

鎧戸　空氣の流通するやうに、板を斜に幾枚もとりつけた戸。

け疊が敷いてあつて、あとの二疊は板の間になつて、その隅には二尺四方の爐が切つてあります。そして四疊半の方には上下になつた一間の押入と、その横に小さい、それでも腰かけるやうになつた洋風の便所がついてゐます。此の通りに、小さいながらも家としての設備は不足なく整つてゐるのですが、たゞひどく年數がたつて、何年も住む人がなかつたと見えて、天井もなくなれば、羽目板もむき出しになつてをり、押入の戸もなければ、四疊半と板の間との間のしきりもないといふ始末になつてゐました。が、私たちはすべてを承知で、それでも悅んで、その家を借りたのでした。それ位私たちは、その小さい廢屋の位置と周圍とに引きつけられたのでした。そして私たちは養魚所を下の家と呼び、山の家を上の家と呼んで

*羽目板

ゐます。この上の家の窓から見た景色はなか〳〵見事なもので、簡單なスケッチをお目にかけますと、窓の前は一寸した草地になつて、其處には八本の若い杉が並び立ち、湖はその杉木立の間にいつでも碧い水を湛へてをり、杉木立からはみ出した左右の部分は、右はホテルの岬から、遠く青木ヶ原の樹、又は海まで續き、左は第二の岬の森が芝地の傾斜になり、最後に赤褐色の石ころの岸になつた處で限られてゐるといふ構圖になつてゐます。湖の向う側の縁は約二千尺の密林でまつ青になつた二つの山です。朝日はその左側の方の山の肩から出ます。太陽がやがて昇らうとしてまだ現れず、先驅の光線が空の雲と湖とを眞赤に燃やす時の輝かしい美しさは、地上のものではないやうな氣がいたします。それは大抵四時

「構圖になつてゐます」

*先驅

半です。そして私はその頃にはもう起きて、その小窓の下に鏡を立てて髪を結ひ、その小窓の外側の筧で、口を漱いだり顔を洗つたりしながら、うつとりしてその景色に見とれます。

さう〳〵お母様、その筧の水の事も私は書洩らしてはならなかつたのでした。それは上の家の後に流れてゐる谷川から、窓の前の草地に拵へた小さい池に引入れてある水で、明神澤の清水と云へば、この邊でも名高い、旨しい水なのださうでございます。冷たいことは勿論です。尙嬉しいことは、湖水までは屆かずに土中に浸込んで仕舞ふ位の谷川の流も、この邊ではまだ中々水量が豐富で、絶えず涼しい瀨の音を響かせながら、大きな岩組の間を流れてゐることです。初めの四五日は承知してをりながらも、それでも毎朝のやうにだまされました。

「おや、雨が降つてるのか知ら。」

かう思つて、耳を澄まして、次の瞬間にそれと氣がついた時には何より樂しうございました。實際、目前の湖水の眺がどれ位美しくとも、この谷川とその水聲と、そしてそれから別れ落ちる筧の清水がなかつたならば、この小さい家の魅力はずつと殺がれることと思ひます。それ位この谷川はこの家とぴつたりしてをります。私は讀むことにも書くことにも疲れると、よくぼかんとしてこの水聲に耳をすます。川は家の後を流れてゐるばかりでなく、私の身體のうちにも流れ込み、流れ拔けてゐるやうな氣がいたします。

お母様、此處まで書いて氣がつくと、私は假住居の家のこと

「湖水までは屆かずに土中に浸込んで仕舞ふ位の谷川の流」

* 岩組

「小さい家の魅力はずつと殺がれる」

ばかりに心を奪はれて、この湖の大事な富士山の美に對しては餘り冷淡であつた樣に思はれはしないかを恐れます。決してそんな處ではないのですから。私は湖は朝から晩まで終日見ない日はなくとも、富士は見ない日が多うございます。

――私の家からは、上の家からでも、下の家からでも、富士は見る事は出來ませんから、村の人たちはそれをこの明神澤の唯一の缺點として數へるやうです。けれども私は目をあければ、いやでもその姿が瞼の裏に落ちて來る氣易さよりも、それを見るために家を離れて二三丁も足を運ぶとか、湖の中まで船を漕出すとかする手數を、却つて樂しいものに思つてをります。またそれがあつて富士の高貴さが珍しく、特別の勿體なさが味はゝれるやうな氣がいたします。實際私たちは朝

＊處
「富士は見ない日が多うございます」

湖にうつる美しい雲を見たり、夕方紺青に暮れ行く透明な空をあふいだりする時に、富士の美しさを想像してわざ〳〵見に出掛けます。右に行けばホテルの後の本栖道から見事な富士が見られ、左の方では、上の家の横から山道傳ひに精進村の方へ一二丁辿つて行つたところで、すばらしい富士が見られます。けれども本當の富士の美しさと莊嚴とを見るためには、上の家の前の小道を後の山へ千尺ほど登つた見晴しへ行かなければならないさうでございます。其處では、富士が河口湖・西湖・

見晴しより精進湖を望む

＊紺青
「わざ〳〵見に出掛けます」

精進湖・本栖湖の四つの湖をその裾に輝かしながら、見上げるばかり高く眞直ぐに聳え、反對の空には、甲州白根・御嶽につゞく日本アルプスの一帶が屏風のやうに連なつて、神仙境のやうな美しさを展開してゐるさうです。いづれ一二日のうちには、私たちもその山へ登つて見ようと思つてゐます。今日もよつ程思ひ立つたのですが、雲が多かつたので見合はせました。

いづれその上で、また出來るだけ委しくその模樣をお母樣に書いて御送り致しませう。風穴と云つて、青木ヶ原の中にある氷の洞窟に入つた珍しいお話も致したいのですが、餘り長くなりますから、それも此の次に一緒に書きませう。では左樣なら。御機嫌でいらつしやいませ。

（週刊朝日）

精進湖・本栖湖 山梨縣西八代郡。

白根・御嶽 山梨縣中巨摩郡。

神仙境 仙人の住む地。うるさい世間を離れた靜かな土地。

日本アルプス この名稱は明治十二三年頃初めてこの山岳地帶を探險した歐人ウィリアム、ガウランドの提唱による。飛騨山脈の連峯を北、木曾連峯を中央、赤石連峯を南アルプスと通稱される。

蕪菁に鼠　（竹内栖鳳筆）

一七　栖鳳畫談

竹内逸

雀

師匠楳嶺翁は雀が好きで、よく二階の窓で、手の平に米粒を列べて、手の上へ集る雀を樂しんでゐられた。

わたしも雀が好きで、よく雀の畫を描く。また不思議に雀の畫を賴まれる。よく雀に就いて問はれたり、訊ねられたりする。またわたしの頭の中には始終雀が往來してゐる。讚めて戴くのは結構だが、知恩院の寶物には拔け雀といふのがある。畫面の雀が遁げ飛んで了つて、雀の輪廓だけが白く殘つてゐる。わたしの雀は紙の上絹の上にゐる。未だ曾て畫面から飛出したことは聽かない。矢張り古人の方がわたし

竹内逸　美術評論家。明治二十四年生。本文は、父栖鳳の畫談の筆記に、筆者の觀察を挿んだものである。

栖鳳　竹内氏。名は恒吉。畫家。元治元年生。

楳嶺　幸野氏。名は直豐。畫家。京都の人。明治二十八年歿、年五十二。

知恩院　淨土宗の總本山。京都市東山區にあり。

よりも上手なわけである。

事實雀を描くことは中々難しい。朝、雀の啼く聲で起される。他の鳥と違つてチュ！と啼く。あのチュ！は非常に感覺的である。わたしはあのチュ！の聲が大好きだ。だが、あのチュ！と啼く時の雀の姿勢を描くことは中々困難である。わたしの描く雀からあのチュ！なる聲が聽えて來ないのは遺憾である。

雀（栖鳳筆）

極端に言へば、あのチュ！さへ表はされてゐれば、雀はどんな恰好をしてゐてもいゝわけである。

と言つて、雀を描く場合、そのチュ！と啼く嘴を克明に觀察

*感覺的

*克明

して、そのまゝ描いて成功するかどうか。これは少し疑問である。事實雀がチュ！と啼く場合、決してその嘴を大きく開くものではない。寧ろその口元の感じは引締つてゐる。だからその嘴に特に外觀上の特徴のない場合、畫家は矢張りそのチュ！を描くことを心掛けねばならない。畫といふものは矢張り單なる寫實では到底滿足できないものだらうと思ふ。それにまた雀の二本の脚。あの細い二本の脚を描くこと、及びその足取りを描くことは中々難しい。恐る〳〵地上へ飛下りた雀の脚は他の鳥とは違つた特徴がある。

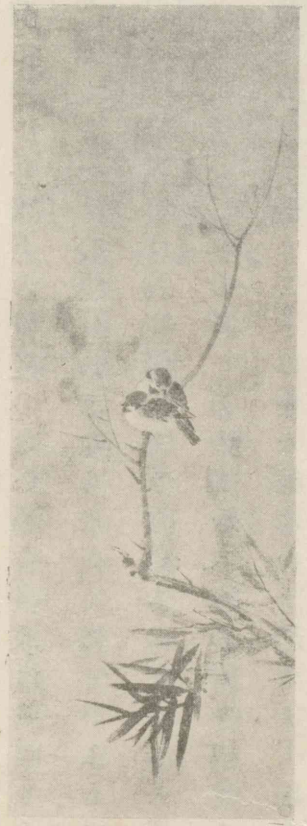
今、湯河原の畫室の壁面には、牧溪の畫だと稱する「竹に雀」の掛物が懸つてゐる。むろん本物ではなく、刷物である。それを見て栖鳳は、「こんなに上手に雀を描くことは容易な

*足取り

今、湯河原の　以下「度を乘越えて行く」迄一字下げの箇所は筆者の言葉。
湯河原　神奈川縣足柄郡にある温泉地。
牧溪　支那南宋末の畫家。

ことではない」と言つてゐる。だから畫といふものも、描けば描くほど難しく、上には上があつて、命の續く限り精進を續けて行かねばならないらしい。然も自然に對し、名作に對して、謙讓の襟度を忘れてはならないものらしい。

栖鳳には、夜といふものが、慰安の生活、休憩の生活、畫家及び人間としての教養の生活であつて、筆者なんか以前は、夜の一時頃からでも平氣で父の家へ行つた。すると栖鳳は臺所の次の部屋で、机に凭れて、せつ



竹に雀（牧溪筆）

「命の續く限り精進を續けて」

＊謙讓の襟度

「畫家及び人間としての教養の生活」

せと本を讀んでゐる。むろん蜘蛛でものこ〳〵現れ出れば、筆者は速刻追つ拂ふが、鼠が現れれば、栖鳳はじつとその鼠を睨んでゐる。だから場合によつては、夜の二時や三時でも机の上に半紙を載せ、傍の硯箱を引寄せ、極粗略に鼠の瞬間の動きを描いてみたり、部屋の壺に投込まれた野花を寫生したりしてゐる。大體筆者の父は生まれつき畫を描くことが餘程好きらしい、そして世の中は栖鳳は雀が上手だといふが、筆者なんか鼠は決して雀に劣るまいと考へてゐる。それに雀は支那畫日本畫にも相當名品が多いやうに思ふが、鼠の畫は一體に尠ない。

歸する處、性に合つた仕事は遙か勤勉の度を乘越えて行く。

松林の丘

汽車に乘る。汽車は走る。そしてその窓から春の朝や秋の夕暮を見る。どうかすると素晴らしい一幅の風景畫の構圖に出遭ふこともある。

そんな時、わたしは、次の停車驛で途中下車をして、線路に添つて、その美しかつた構圖の地點まで逆戻りをする。だが、不思議に、車窓から發見したものと同一の構圖は見出せない。結局草臥損である。一瞬に閃いた構圖といふものは非常に嚴密なもので、その美しさが光線の具合によつて變化することもあるし、且また車中での位置と線路上での位置とでは、眼の高さが違つてゐる。その僅かな差ですら、その風景が美し

*構圖

*草臥損

い構圖に見えたり、それ程のものではない場合すらあり得る。

松林の丘は美しい。わたしは今までに度々松林の丘をスケッチしてゐる。然し畫家としては、その松林を遠望してゐるだけではもの足りなくて、スケッチの後、松林へ行つて、松林の中を歩いてみる。すると、その松の集團は、假令遠望的には美しくとも、イザその場に踏込んで、具さにその一本々々を觀察すると、實に不恰好な松の集りである。そんな松を引拔いて來ても到底庭園へは植ゑられさうもない。

では、なぜそれが、集團としての松林が美しいのかと言ふと、さうした不恰好な松はお互の枝で補ひ合つて、總體の美しさを現してゐるからである。

人間の生活といふものも、假令個々人は幾分の不完全であ

「お互の枝で補ひ合つて、總體の美しさを現してゐる」

らうとも、お互に補ひ合つて、伸びられる部分へは自由に伸びて行つて、そして集團としての美しさを現すべきものではないかと思ふ。

「集團としての美しさ」

猫

七八年以前わたしは淡交會へ、猫の畫を出品した。いろいろ讃辭を貰つて、恐縮してゐる。

畫家が畫筆を執る場合、大略これを二つに分けることができるだらうと思ふ。

第一の場合は、その畫家の長い間の畫的生活から、觀察や寫生の上から、今描かうとするものがすつかり呑込めてゐて、猫も見ず、スケッチを參考とせず、思ふまゝに描いて了ふ場合。

淡交會　日本畫家の横山大觀・川合玉堂・竹内栖鳳・山元春擧・下村觀山・小堀鞆音等の創始せる美術家團體の展覽會。

第二の場合は、ふと猫を見て、その瞬間「猫を描かう」と決心して、その生きた猫を手本として描く場合。

わたしの描いたあの猫の畫はこの第二の場合である。

猫　（栖鳳筆）

初秋の午後、わたしは沼津の町を歩いてゐた。八百屋の前を通りかゝつた。するとその八百屋の前に置かれた荷車の上にあの猫が寢てゐた。吾々は年中方々で猫は見てゐるが、あの猫はわたしの畫材となるには恰好の猫だつた。そしてわたしは、その荷車の猫を見た時、無意識に「ははア……。徽宗皇帝の猫がゐる

沼津　靜岡縣の東部駿河灣頭の臨海都市。

＊畫材

徽宗皇帝　宋第八代の皇帝。名は佶。神宗の子。「徽宗皇帝の猫がゐるぞ」

ぞと言つたんださうだ。それはわたしの傍にゐた人が、後でわたしに話してくれたことで、わたしはその時何を喋つたか覺えてゐなかつた。徽宗皇帝とはかの有名な支那宋代の花鳥畫の名畫人である。事實わたしはその場合、その猫が現實の動物ではなく、徽宗皇帝の描いた猫の畫に見えた。わたしはその場に踏立つてスケッチを始めた。そして宿へ歸つた。だがどうしてもその猫を諦めることができなかつた。街上に踏立つての寫生位では、核心までその猫が摑めてゐないやうに思はれて殘念だつた。

それでわたしは宿の人に賴んで、その猫を貰ひ取る交渉を始めた。再三交渉を重ねた結果、わたしの人物を說明して、一枚の畫と猫とを交換して貰つた。そして沼津から京都へ連

*核心

れ歸り日夜座右に遊步させて、あの作品を作つた、むろんその猫はもうわたしの家にはゐない。あの作品を仕上げると間もなく、わたしは東京へ出た。その不在中、猫の行衞は不明になつて了つた。なんだか、わたしには、あの猫は本當の猫ではなく、誰かから徽宗皇帝の掛物を拜借して、それを返して了つたやうな氣がしてならない。

鮮魚の色

畫家は色彩に對して敏感である。畫家といふものは世の人々が、美しいとか、綺麗だとか感ずる以上に、もつと突き進んで色彩といふものを研究してゐなければならない。新鮮な魚の色は本當に美しい。見れば見るほど美しい。

*遊步

吾々はよくさうした新鮮な魚を市場で見て、美しい色だと思ふ。然しあの魚を海岸で、今捕つたばかりのを見ると、市場で見るよりも更に美しい。陸の花よりも美しい。だからわたしは魚が海の中に住んでゐる時は、どんなに美しいのだらうかと、想像をめぐらせてゐる。畫家にとつては寶玉のみが美しい存在ではない。そしてまたわたしは、かうして海から上つたばかりの魚をときゞ〳〵海岸で寫生してみるが、その色彩の美は實に刻々に退化して行く。だから魚の本當の美しさといふものは、陸へ上げられた瞬間だけだと言へる。

輪廓のこと

私はときゞ〳〵寺院の寶物を拜觀に行く。廊下の杉戸とか

*退化

方丈の襖とかに畫が描いてある。そしてどうかすると、その畫の繪の具はすつかり剝落して了つて、鷄とか犬とかの形だけが殘つてゐることがある。處が、不思議にその殘された形卽ち輪廓畫だけで、それが優れた作品であることを知ることがある。これは輪廓といふものが畫に於て、如何に大切であるかを、雄辯に物語つてゐる。

然し、秋の夜など、座敷に坐つてゐると、月の光で庭の竹が障子に映ることがある、それは影、卽ち竹の輪廓だけが墨畫のやうに映つたもので、藝術品ではないが、下手な畫よりは遙か上物である。この竹の影のことは、從來屢〻畫論の解說用例に使はれてゐる。では障子に映つた竹や鷄や犬の影を、そのまま墨でなすつても、なぜ藝術とならないかといふと、畫といふ

*剝落

*上物

ものは、形を正確に寫し取ることだけが目的ではなく、また形としての絶美そのまゝを寫しても、何等畫としては絶美ではないからである。

畫家は常習的に、線を以て輪廓を描かうとするが、そもそも輪廓といふものは、線などあつても無くつても明瞭でも不明瞭でも、そんなことはどうでもいゝことで、若しその畫家が形といふものをしつかり摑んでさへゐれば、藝術としての見事な輪廓は自然に具はるものであらう。そこが畫家としての仕事であらうと思ふ。

（栖鳳閑話）

* 絶美
* 常習的
「形といふものをしつかり摑んでさへゐれば、藝術としての見事な輪廓は自然に具はる」

一八 秋雜感

大河内正敏

赤蜻蛉が出る頃が一年中で一番好い時候だ。閻魔蟋蟀が好い聲で鳴出したからもう秋の訪れだ、と子供の頃によく母が話したものだ。其の頃の自分は炎暑の時は水に飛込む樂しみがあつたから、涼しい日は恨めしいくらゐに思つた。永く水の中にゐられないからである。それだけ秋が來ようと、冬が訪れようと、無頓着であつた自分も、此の頃は八月初の立秋さへ、氣休めだけでも早く來ないかと待たれるが、反對に年を取つた母は、夏の暑さには餘り困らないとみえて、近來はそれ程秋を待たなくなつた。然しよく〳〵秋草が好きとみえて、萩の盛りの百花園には何時でも行きたい、われもかうを活

大河内正敏　工學博士。理化學研究所所長。子爵。明治十一年生。
* 氣休め
* よく〳〵
百花園　東京市向島區にある遊園地。

けたい、藍が咲いた、蓼が好い色だ、としきりに嘆美してゐる。

秋草に鳴く蟲の聲も、幾千年來聞く人々によつて、それ〴〵好き嫌ひも、違つた感想も起つたであらうが、自分は初秋のものよりも晩秋の蟲の音を愛する。初秋の方は如何にも涼しいと言ふ感が起るが、もうそろ〳〵霜が降りてこほろぎも穴に入る頃には、人によつて哀調を覺えるかも知れないが、ほんたうに澄んだ、綺麗な聲が聞かれる。恐らく空氣が乾いて來て、而も溫度が下る爲であらう。

秋の紅葉で一番好きなのは櫨だ。東京では最も早く眞紅に染まる。往々黃色になる質もあるが、それは銀杏に及ばない。山楓の紅葉は勿論好いが、東京では葉の緣が燒けて、庭木の紅葉は見劣りがする。畑の中の一本立ちの柿紅葉は慥に

われもかう 吾木香。薔薇科の多年生草本。
藜 藜科の一年生草本。
蓼 蓼科の一年生草本。
櫨 漆樹科の落葉喬木。
山楓 槭樹科の落葉喬木。
「畑の中の一本立ちの柿紅葉」
＊柿紅葉

秋の武藏野の高原に見られる第一の美しさであるが、紅葉の好いのは澁柿に限るやうだ。他の木は大凡葉が落ちた中に柿の實が二つ三つ、處々に葉を殘してゐる風情は、黑い而も變化に富んだ形の枝と對應して、實に好い。赤く熟した實は多いと却つて邪魔になる。一體秋の紅葉を賞美するのは、日本位盛んな處はないやうだ。巴里の郊外あたりでマロニエの葉が落ちる風情は惡くはないが、たゞ秋だなと思はせるばかりで絢爛な目も覺めるやうな紅や黃の交つた美しい紅葉の中に、綠の常磐木の點在する景色は、日本でなくては見られない。それは全く日本が多濕の爲だ。夏の蒸暑さに惱まされる我々は、實にニューヨーク邊の溫度と比べれば遙かに低いのであるが、たゞ濕氣が多いばかりに不愉快を感じてゐる。

武藏野 關東平野の一部。普通には埼玉縣川越市以南、東京府府中に至る間に擴がる原野を指す。
「紅葉を賞美するのは、日本位盛んな處はない」
マロニエ 殼斗科に屬する亞熱帶性の落葉喬木。
＊絢爛
「多濕」
日光 栃木縣上都賀郡。男體山・中禪寺湖・華嚴瀧・東照宮等ある名勝地。
妙義 妙義山。群馬

その蒸暑さがあればこそ、日光、妙義、高尾、淡路の小豆島でも、耶馬溪でも、あの美しさが見られるのである。雪國の春には百花が一時に咲揃ふ。梅も、櫻も、牡丹も、桃も、時を同じくして咲くのが常だ。長い〳〵冬籠りに閉ぢこめられた人々が、一度に春を迎へた樂しさと同じやうに、蒸暑さに惱まされた我々は、秋になつてよそでは見られない綺麗な紅葉に出逢ふのも、自然の公平な賜物とでも言ふのであらうか。秋の紅葉の美しさを一番よく捉へたのは、宗達よりも光琳だ。紅葉の趣味を遺憾なく發揮し得た畫家は、世界でたゞ光琳一人と言つてもよからう。光琳の紅葉だけは、たつた一枚の葉つぱだけで紅葉の持味を心ゆくまで現してゐる。光琳派の繪から紅葉を取去つたならば、櫻のない春のやうなものだらう。（陶片）

縣北甘樂郡・碓氷郡に跨がり海拔一一〇四米。奇峰を以て鳴る。

高尾 京都市右京區。清瀧川に沿ひ紅葉の名所。

小豆島 香川縣小豆郡。瀬戸内海の島。景勝寒霞溪あり、東の妙義と竝び稱せらる。

耶馬溪 大分縣北部山國川の上流及び中流に亙る勝地。

「自然の公平な賜物」

宗達 俵屋氏。畫家。傳未詳。

光琳 尾形氏。名は惟富。畫家。享保元年（一七一六）歿、年五十六。

「たつた一枚の葉つぱだけで紅葉の持味を心ゆくまで現してゐる」

＊持味

「櫻のない春」

一九 將軍乃木

櫻井忠溫

曠野に立ちて

乃木さんは涙もろい人であつた。いこぢなところがあつて、一寸見には近づきにくいやうだが、人一倍情にはもろい人であつた。

旅順開城の際、貴衆兩院議員の一行が旅順へ行つて、乃木大將に令息戰死の悔みをいつたところが、乃木さんは、ぽろりと涙を落された。

副官が側にゐて、「眼を惡くしてゐられるものですから。」といつて、場を繕つたことがある。

二百三高地を爾靈山（汝の靈）と名づけたのも、こゝに死んだ

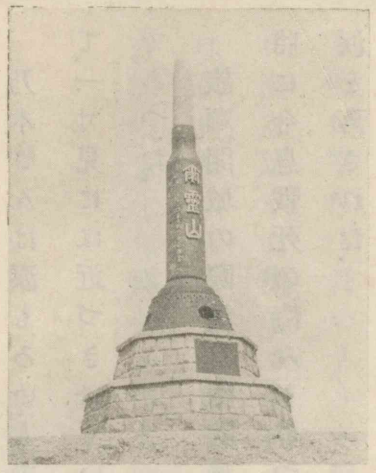
櫻井忠溫 陸軍少將。明治十二年生。

將軍乃木 名は希典。日露の役、第三軍司令官に補し、攻圍半歲にして旅順を陷れた。後從二位伯爵に敍せられた。大正元年九月十三日薨、年六十四。

「涙を落された」

すべての人のためにといふ意味であつた。保典の死に對しても、爾靈山の名は萬斛の涙を含む文字となつた。

明治三十七年八月末の或日の午後、第一回總攻撃に失敗して、第一線に生き殘つてゐる者も、もう戰ふ力はなかつた。そしてあの何萬とも知れぬ負傷者が、あの谷この野に眞黑に横たはつた。死者は無論多かつた。その死體を燒くことすら出來なかつた。三千の聯隊、一夜にして五十人になつたのもあつた。



二百三高地の忠魂碑

當時、乃木大將の下に集つて來る第一線からの報告は、いつ

第一回總攻撃 八月十九日から二十四日まで六晝夜に亙つた血戰。

れも大將の胸を痛めるもののみであつた。「師團の數回の突撃も效を奏せず、今はたゞ殘兵を集めて只一回の突撃を行はんのみ。」「師團は命令を遵奉するの一點に於て、突撃以て骨を曝さんのみ。」といふ報告さへあつた。

師團は只僅かに一回の突撃を行ふ餘力あるのみ。師團は命令なるが故に突撃骨を曝すにありて、成功固より望み難し、といふ報告であつた。「死ね。」と命令する乃木大將の胸中、かかる報告を耳にする胸中は、熱鐵を呑むの思ひであつたらう。

全滅、全滅、それは旅順戰の名物であつた。第一師團全滅、第九師團全滅、……と血涙を含む旅順戰の代表語であつた。バルチック艦隊は來さうだ、北方の戰場では乃木軍の北進を待つてゐるといふ時、前面の狀況は全滅につぐに全滅を以てし、

「只一回の突撃」
「一點に於て」
「餘力あるのみ」
「命令なるが故に」

バルチック艦隊 司令長官はロジェストヴェンスキイ中將。

徒らに死の部隊を拋つに等しい時に當つて、乃木大將は八つ裂にされるより苦しい思ひであつたらう。

その時、乃木さんは靜かに歩いて、野の中に立つた。見渡す限り負傷兵ならざるはない。

乃木さんの眼は涙に光つた。そして後に倒れんばかりになつたのを、副官がやつと支へた。

暫くして乃木さんは副官に「氷を持つて來い。」といつた。

乃木さんは負傷兵の側に行つて、「よくやつてくれた。早くよくなつて又來てくれよ。」と、一々手をとるやうにしていつた。そして大勢の負傷兵の間を、一々かういつて慰めて歩いた。

やがて副官が運んで來た氷を割つて、負傷兵の口へ入れて

「死の部隊」

「眼は涙に光つた」

やつた。私もその氷の一片を貰つた一人であつた。負傷兵達は涙を流し〳〵乃木さんを仰ぎ見ながら、乃木さんのもとで死なんことを思はざるものはなかつた。

廣い野の中に立つた乃木さんの衰へた姿、それは今に忘れ得ない。

私の傷ついたのは第一回の總攻撃であつた。乘るか反るかの戰爭であつたが、殘念にも失敗した。從軍米國記者の著述中にその時の光景をかう書いてゐる。

「第一回總攻撃のあつた八月の一週間、乃木大將は常に前線に出て居た。此方の丘に立つかと思へば、又彼方の山に移つた。そして、攻撃隊が相率ゐて露軍の砲火を浴びつゝ、さながら日光の下に消ゆる靄のやうに、相次いで消え行くの

「乃木さんのもとで死なんことを思はざるものはなかつた」

「乃木さんの衰へた姿」

「消え行くのを注視した」

を注視した。」

「將軍は其の所屬軍隊を驅つて、勇氣と忍耐力の有らん限りを盡くさしめた。しかも自らも亦、全く同樣であつた。露軍の砲火に斃れたり、病院に悶死した士卒の病苦よりも、更に深刻を極むるものであつた。」

淋しき影

乃木さんが旅順で苦しんでゐる間に、切腹しろの、辭職しろのといふ手紙が、いくつともなく來た。乃木さんの家へも、石を投げたり、門前で罵るものさへあつた。中には、「俺の息子を生かして歸せ、そんな無駄死をさす爲に戰爭にやつたのぢやない。」といつたやうな手紙を寄越したものさへあつた。

勝つたとなると、石を投げたことも忘れて、提灯行列や旗行列で、その門前で萬歲を歡呼した。戰況不利となると、石を投げた。石を投げたり、提灯行列をやつたりした。それも國を思ふ心に外ならなかつた。たゞ勝たしたい、勝つて貰ひたい一念からであつた。

戰場の乃木さんの手許へは、何千通といふ問責狀が來てゐた。乃木さんはこれを見られては、腸九廻の思ひであつたらう。

旅順戰が捗らぬので、誰しも苛立たしくなつた。乃木さんとても、ゆつくり構へてゐるわけではない。しかし、さう思ふやうには行かなかつた。止むを得ず、多くの人を殺さなければならなかつたのである。されば、こそ、保典少尉の死を聞いても、「これで申し譯が立つ。」といつたくらゐ乃木さんは、日夜

「それも國を思ふ心」

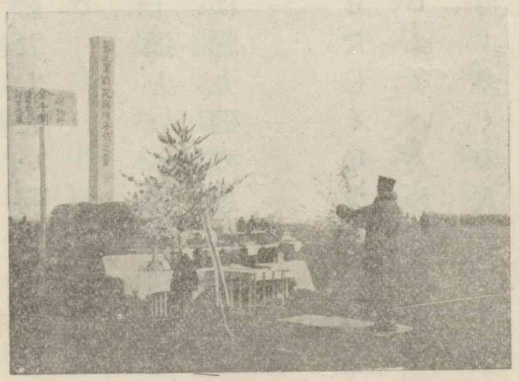
「腸九廻の思ひ」

「これで申し譯が立つ」

胸を引裂く思ひでゐたのである。

乃木さんは何事も自分の罪だと思つてゐた。こんな手紙が來ても幕僚には「だれにも言ふな。」といつてゐた。これが漏れては士氣が沮喪するからである。

旅順戰直後のこと、幕僚の一部を轉職させるやうな相談があつた時、乃木さんは承知されなかつた。この場合轉職さしては、旅順戰の失敗からだと世間で思ふだらう、といふ乃木さんの深い考からであつた。かういふことまで、乃木さんは苦心しなければならなかつた。



水師營附近に於ける招魂祭
（乃木大將が讀朗してゐる祭文）

＊沮喪

旅順が落ちた時、乃木さんは戰死者のために祭壇を設け、その前に立つて、泣く〳〵弔詞を讀んだ。列座みな泣かぬ者はなかつた。乃木さんの胸を察すると、たゞ「死」の一字に盡きる。

乃木さんは、どうしても生きて歸れぬと思つてゐたやうだ。奉天會戰でも、乃木さんは第一線へ飛びだして仕方がなかつた。止めても〳〵飛びだした。あたりの者は、「乃木さんは死ぬつもりだ。」といつてゐた。

併し、乃木さんはこゝでも死ねなかつた。そして心を狹めて、東京へ凱旋——といふよりも、孤影＊茫々として歸つて來た。

人生電車

かうして、乃木さんは淋しい一生を終つた。

乃木さんは、こんなことを言つたことがある。

旅順が落ちた時　明治三十八年一月一日、敵將ステッセル降屈、翌二日調印、十三日入城式を行つた。

「死ぬつもりだ」

「心を狹めて」

＊孤影茫々

「電車に乘つてゐると、座席を覘つてゐる者は坐れないで、ふらりと入つて來た者が席を得る。これが世の中の運不運といふものだ。」

乃木さんの一生も、それであつた。乃木さんは、人生電車の幸運者ではなかつた。

人間としての乃木さんは、淋しい暗いものであつた。地位を得、名譽を得るといふなら、乃木さんは、もとより伯爵であり、功一級であり大將であつた。しかし乃木さんには、自分を狹いものにするほど寂しいものがあつた。人間乃木としては、一生涯、大きな石に壓されてゐるやうな心もちで暮して來た。暗いものが煙のやうに乃木さんの一生を蔽うてゐた。

（將軍乃木）

「人間としての乃木さん」

「暗いものが煙のやうに乃木さんの一生を蔽うてゐた」

二〇　箱根路

正岡子規

箱根路にかゝれば、なんとなく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白雲光あり。

湯元に辿り着けば、一人のをのこ袖を控へて、「よき宿まゐらせん」といふ。引かるゝまゝに行けば、むさくろしき家なり。前日來の病も未だ全くは癒えぬに、この旅館に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、やゝ落膽したるが、これこそ風流の本意、行脚の眞面目なれと、そのまゝこゝに宿りぬ。

次の日まだき起きいでつ。板屋根の上の滴るばかりに霑ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。夜もすがら雨と聞

正岡子規　名は常規。俳人。明治三十五年歿、年三十六。

湯元　神奈川縣足柄下郡湯本町。箱根七湯の一。

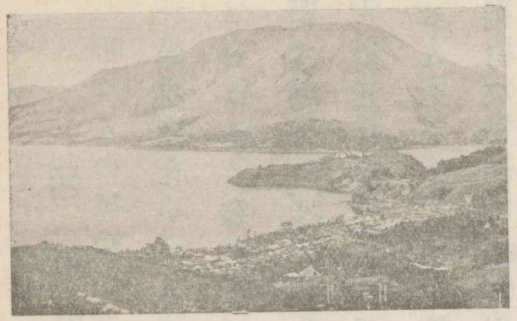
＊煙霧模糊

「風流の本意」

＊霑ふ

きしは、筧の音、谷川の響なりしものをと、はや山深き心地ぞすなる。

今日は一天晴渡りて、瀧の水朝日に閃くに、鶺鴒の小岩傳ひに飛歩くは、逃ぐるにやあらん、此方へとしるべするにやあらんと、草鞋の運びおのづから輕らかに、箱根街道登り行けば、鶯の聲左右にかしまし。



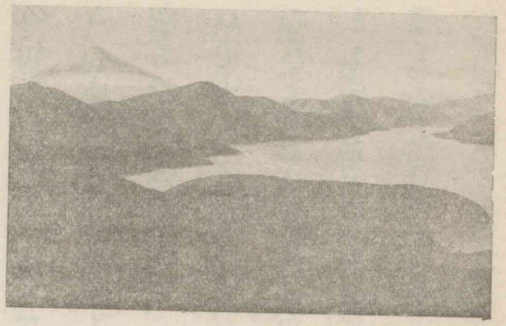
蘆の湖（其一）

病み疲れたる身の、一足登りては一息ほつとつき、一坂登りては巖端に休む。駕籠舁の頻りに駕籠を勸むるを耳にもかけず行けば、はや二子山鼻先に近し。谷に臨める形ばかりの茶屋

「しるべするにやあらん」

「駕籠を勸むるを耳にもかけず」

二子山　箱根中央火山の東南端。



蘆の湖（其二）

に腰掛けて打見やれば、千仞の谷間より木を負うて登り來る樵夫二人、ものも得いはで汗を滴らすさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足をこの茶屋に休むれば、それ〴〵にいたはる老婆のなさけ、一碗の澁茶よりもなほ濃し。「名物ありや。」と問へば、「力餅といふものなり。」とて、大きなる餅の燒きたるを二つ三つ盆に盛り來る。力餅の力を藉りて登ること一里あまり、杉・樅の大木道を挾み、元箱根の一村、目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙境に入りたるが如し。

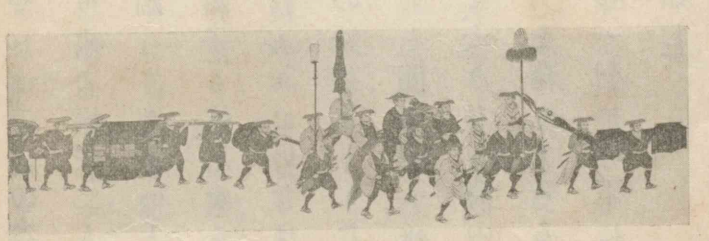
幾重の嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みて、登り着きたる山の頂

「一碗の澁茶よりもなほ濃し」

＊藉る

元箱根　足柄下郡、蘆の湖々畔の村。

に、鏡を磨ぎ出せる蘆の湖を見初めし時の心廣さよ。あまりの絶景に、恍惚として立ちもえ去らず、木の株に坐してつく〴〵と見れば、山更に靜かにして、風吹かねども冷氣冬の如く足もとより登りて、身にしみ渡る心地せり。波の上に飛びかふ鶺鴒、忽ち來り忽ち去る。秋風に吹惱まされて力なく、水にすれつあがりつ胡蝶のひら〳〵と舞ひ出でたる、箱根の頂とも知らでやあちん。遙かの空に、白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、こゝよりもなほ二千



大名行列の圖

「鏡を磨ぎ出せる蘆の湖」 **蘆の湖** 箱根山頂の湖。周圍約一九粁。

「秋風に吹惱まされて力なく」

「白雲とのみ見つるが上に」

＊兀然

仞はあるべしと思ふに、更にその影を深く沈めて、蓮に縮め寄せられたる樣いはんかたなし。

箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに「ここは湖水の產にしてこゝの名物なり。」といふ。名を問へば「赤腹」と答ふ。面白き魚の名なり。是より山を下るに、見渡す限り白薄なり。

金紋先箱の行列堂々として、鳥毛・片鎌など威勢よく振立てて練り行きし街道の繁昌振も、あはれ物の本にのみ殘りて、草刈る童の行き通ふ小道一筋を除きての外は、草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列の俤を薄の穗に留めたり。

槍立てて通る人なし花薄

（旅の旅）

箱根驛　蘆の湖々畔にある村で、その東端を關所の址とする。

赤腹　淡水產、形は鮎に似て腹が赤い。

「行列の俤」

——〔終〕——

常用漢字表

附錄

千八百五十九字（臨時國語調査會決定表）

（一）本表にない漢字は假名で書くこと。
（二）固有名詞には本表にない文字を用ゐても差支ない、ただし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること。
（三）代名詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと。
（四）外來語は假名で書くこと。

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】久之乏乗【乙】乙九乞也乳乱(亂)【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交亦京亭【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使来(來)例侍供佳依侮侯侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸併(併)倉個倍倒候借倫倶仮(假)偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚偽(僞)僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光免克兎児(兒)【入】入内全両(兩)【八】八公六共兵具典其兼【冂】冊再【冫】冬冷凉凖凌凍【几】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刺(刻)則削前剛副割創剰(剩)劇劍剤(劑)【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝労(勞)募勢勤勳励(勵)勧(勸)【勹】包【匕】化北【匚】匿【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厭【厶】去参(參)【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品咸員哲唐唱商問啓唯善喉喜喪單喫嗣嘉器噴嚴嘱(囑)【囗】囚四回因困固国(國)囲(圍)園円(圓)図(圖)團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀(塀)増墨墜壁壇壓壊(壞)【士】士壮壱(壹)寿(壽)【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妥妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻娄威娘娯娠婚婦娼婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫学(學)【宀】冗(冗)宅守安完宏宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢実(實)審写(寫)寛宝(寶)【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尚【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屈屋展層履属(屬)【山】山岡岩岳岸峠峯島峡崇崎崩【巛】川州巡巣【工】工左巧巨差【己】己【巾】市布帆希帝帥師席帳帶(帶)常帽幅幕幣【干】干平年幸幹【幺】幻幼幾【广】床序底店府度座庫庭

庶康廉廊廢(廢)廣廳(廳)【廴】延廷建廻【廾】弄弊【弋】式【弓】弓弔引弟弱張强彈【彡】形彩彫彰影【彳】役彼往征待律後徐徑(徑)徒(徒)得從(從)御復徵徵德徹【心】心必忌忍志忘忙忠快念怒思恣急性怨怪怯恐恥恨恩恭息悔悟悲悖悲悼情惑惜惠惡惟惰悩(惱)想愁愉意愚愛感慈態慕慘(慘)慢慣慨慮慰慶慾憂慎憐憚憲憶憾憤懇應懲懷懸恋(戀)【戈】成我戒戰戲(戲)戴【戶】戶戻房所扇【手】手才打扱扶批承技抑投抗折抱抵押抵拂拍拒拓拔拘拙招披拜括拳拾持指振捕捧捨掃授掌排掛探探扣(控)推接提揚換握揮援描捕損搖搜摘携摩撫扶(擇)擊操担(擔)拠(據)擬擴摂(攝)【支】支【攴】收改攻放政故叙(敍)教敏救敗敢散敬敵敷数(數)整【文】文【斗】斗料斜【斤】斤斥斬斯新断(斷)【方】方施旅旋族旗【无】既【日】日旦旨早旬旭昇昌明易昔星春昨是映昭時晩晝普景晴晶智暇暖暗暑暮暴暦曇曜【曰】曲更書曹會替最會【月】月有朋服朕朗望朝期【木】木未末本札朱机朽杉材村束柿杯東松板枕林枚果枝枯架柄某染柔査柩柱柳栗校株根格栽桃案桐桑梅条(條)梨械棄棋棒棟森棺植楠業極栄(榮)構概樂(樂)楼(樓)標樞模様(樣)樹橋機横檄檢櫻欄權(權)【欠】次欲款欺歌歎歐歡(歡)【止】止正此歩武歳歴帰(歸)【歹】死殊殉殖残(殘)【殳】段殺殿毀【毋】母每毒【比】比【毛】毛【氏】氏民【气】气氣【水】水氷永汁求汗汚江池決汽沈沒沖沙汰河沸油治沼沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津洪活派流浦浪浮浴海浸消渉液淑涙淡淨淫深混清浅(淺)添減渡溫測港渇湖湧湯淵(淵)源準溢溶溺滅滋滑滯(滯)滴満(滿)漁漂漆漏濱漠漠漫漸潔潛(潛)潮沢澤激濁濃湿(濕)濟(濟)濱滝(瀧)灣(灣)【火】火灰災炊炎炭烈無然煉煮煙照煩熱熱燃燈燒営(營)爆炉(爐)【爪】爪爭為(爲)爵【父】父【爻】爾【片】片版牌【牙】牙【牛】牛牧物牲特犠(犧)【犬】犬犯狀狂狩狹猛猫猶獄独(獨)獲(獲)獵(獵)獸獻(獻)【玄】玄率【玉】玉王玩珍珠班現球理琴環璽【瓦】瓦瓶(瓶)【甘】甘甚【生】生産甥【用】用【田】田由甲申男町界畏畑畜畝略番画(畫)異当(留)當畳(疊)【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾病症痘痛痢療癖【癶】登発(發)【白】白百的皆皇【皮】皮【皿】皿盆益盛盜盟尽(盡)監盤【目】目盲直相省眉看眞眠眼着睡督【矢】矢知短【石】石砂砲破研(研)硬硯碁碎碑確磁磨礎【示】示社祈祕祖祝

神票祭禁禍福禦礼(禮)【禾】秀私秋科秒租秩移税程稚種称(稱)稲稿穀積穂穏【穴】穴究空突窃窒窓(窓)窮【立】立章童端競【竹】竹竿笑笛符第筆等筋筒答策算管箱節範築篤簡簿籍【米】米粉粒粘粗粹精糖糞【糸】系紀約紅紋納純紙級紛素紡索紫累細紳紹紺終組結絶絡給統糸(絲)絹経(經)絲維綱(綱)綴綻綿緊緒線締緣編緩緯練縛縣縫縮縱(縱)総(總)績繁織繕繪繭繰(繰)繼(繼)続(續)【缶】欠(缺)【网】罪置署罰罵罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽翁翌習翼【老】老考者【而】耐【耒】耕【耳】耳聖聞聯聴(聲)聽(聽)【聿】肅(肅)肇【肉】肉肖肝股肥肩育肺胃背胎胞胴胸能脈脊脚脱腐腕脳(腦)腰腸腹膚膜膝胆(膽)臆(臆)臍(臍)【臣】臣臥臨【自】自臭【至】至致台(臺)【臼】與興挙(擧)旧(舊)【舌】舌舎【舛】舞【舟】舟航般舵舶船艦【艮】良【色】色【艸】芝花芽芳苑苗若苦英茂茶草荒荷荘菊菌菓栄華万(萬)落葉著葬蒙蒸蓄薄(薄)藏(藏)藤薬(藥)【虍】虎虐処(處)虚(虛)号(號)【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融虫蟲蚕(蠶)蛮(蠻)【血】血衆【行】行術街衝衡衛【衣】衣表裏袋袖被裁裂裏裕補裝裸製複褒襲【襾】西要覆【見】見規視親覚(覺)覽覗(覗)【角】角解(解)触(觸)【言】言訂計討訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠試詩詰話詳誇(誇)誌(誌)認誓誕誘語誠誤說(說)課調談請論(論)諭諸諾謀(謀)謁講謝謠謹謬証(證)識譜警訳(譯)議護(護)讃(讚)讓(讓)【谷】谷【豆】豆豊(豐)【豕】豚象豪豫【貝】貝貞負財貧貨販貫責貯貳(貳)貴買貸費貿賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤(賤)賦質賴購贈(贈)贊(贊)【赤】赤【走】走(走)赴起超越趣【足】足距跡路踊躍【身】身【車】車軌軍軒軟軸較(較)載輕(輕)輩輪(輪)輸(輸)輯輿轉【辛】辛弁(辨)辯辞(辭)【辰】辱農【辵】辵迎近返迫迭述迷追退送逃(逃)逆(逆)透逐途通速造連週進逸(逸)遂遇遊運過道達(達)遙(遙)遞(遞)遠遣適遭遲(遲)遷選遺(遺)遵避還辺(邊)【邑】邦邪邸郊郎郡部郵都鄭【酉】酌配酒酢酬酷酸酔醜医(醫)【釆】釈(釋)【里】里重野量【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅(銅)銘(銘)鋭鋒鋼(鋼)錄(錄)錢(錢)錯鍋(鍋)鎖鎮鏡鋳(鑄)鐘鉄(鐵)鑑(鑑)鑛(鑛)【長】長【門】門閉開閑(閑)間閣(閣)閲(閲)関(關)【阜】防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊階隔隙(隙)際障(障)隣隨(隨)險(險)隱(隱)【隹】隻雀雄雅集雇雌双(雙)雜離難【雨】雨雪雲(雲)零雷電需震霜霧露(露)靈(靈)【靑】青靜(靜)【非】非【面】面【革】革靴【音】音響【頁】頂項順(順)頓預(預)頑(頑)領頭(頭)頻題(題)額顔(顔)願顚(顚)類顧(顧)顯(顯)【風】風【飛】

飛飜【食】食飢飲飯飾養餓
余(餘)餐餅(餅)館(館)【首】
首【香】香【馬】馬馳駁
馱駐騎騰騒驅驗驚駅(驛)
【骨】骨髄(髓)体(體)【高】
高【髟】髪【鬥】鬪鬪【鬼】
鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛【鳥】
鳥鳩鳴鶴鶏【鹵】塩(鹽)
【鹿】庶(鹿)黒(麗)【麥】麦
(麥)【麻】麻【黄】黄【黑】
黒默点(點)党(黨)【鼓】鼓
【鼻】鼻【齊】斎(齋)【齒】
歯(齒)齢(齡)【龍】竜(龍)
【龜】亀(龜)

『注意』本表ニオイテ〈〉印ヲ附シタ原字ヲ捨テ、コレニ對スル簡易字體ヲ一般ニ採用スル積デアル。

女子國文新編（四年制）全八册奥附

自卷一 至卷八 定價 各 金五拾八錢

昭和十二年七月二十日 印刷
昭和十二年七月二十三日 發行
昭和十三年一月二十二日 訂正再版印刷
昭和十三年一月二十五日 訂正再版發行

著作者 東京市神田區美土代町十八番地 垣内松三

發行兼印刷者 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社文學社 代表者 小林竹雄

印刷所 東京市本郷區真砂町三十六番地 日東印刷株式會社

發兌 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社文學社 東京市神田區三崎町三五一番地 電話神田三八七八番 振替口座東京三八七八番

關西一手販賣所 大阪市西區鞍北通り二丁目 株式會社盛文館 電話土佐堀一五二三番 振替口座大阪七四三番

不許複製